北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書
V

1980

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書
V

1980

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

210.2
M
61

序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、昭和48年度から遺跡の発掘調査を実施していますが、今年度までに16遺跡の調査を完了しています。これらの結果については、その一部をすでに報告したところでありますが、このたび昭和53年度に実施した木之本町黒田長野古墳群、同町黒田東山遺跡の発掘調査結果を報告するはこびになりました。

両遺跡は、ともに、工事によって不時発見されたものでありますが、北陸自動車道は、昭和55年度開通に向けて急速に工事が進行している状況であり、従って、日本道路公団の要請によって、不慮な体制ながら、急拠発掘調査を実施し、記録保存を計ったところであります。しかし、長野古墳群では、全国に数の少ない古墳時代中期の方墳２基をはじめ、古墳時代後期の横穴式石室墳、平安時代の古墓、東山遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓と思われるものが検出される等、貴重な資料を提示するものでありました。

埋蔵文化財の場合、このように記録保存のやむなきに至ることが多いのですが、本報告書がここに上梓されることで、歴史に対する認識の一助となれば最も幸せとするところであります。

最後に、発掘調査及び整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々や地元関係者の方々に深謝します。

昭和55年３月

滋賀県教育委員会

教育長　中山　正

例　言

1．本書は、日本道路公団大阪建設局の実施する北陸自動車道建設工事に伴う黒田長野・東山古墳群の発掘調査報告書である。

2．本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、日本道路公団の委託により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

3．本書は、昭和53年度に発掘調査を実施し、昭和54年度に整理した成果である。

4．調査および整理・報告には、滋賀県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘が指導にあたり、財団法人滋賀県文化財保護協会技師葛野泰樹、嘱託調査員石原道洋が担当した。

5．整理は、遺物実測分類を田中勝弘、石原道洋が行ない、遺構写真は石原が、遺物写真は田中が撮影した。図面整理、図版の作成は黒田長野古墳群を田中が、東山遺跡を石原が行なった。

6．現地調査及び整理作業には以下の諸氏の協力を得た。

財滋賀県文化財保護協会：鬼柳彰、谷口義介、林　　純、中川通士、岡本隆子、岩崎陽子

大谷大学学生：黒坂秀樹、葛原秀雄

京都産業大学学生：宮崎雅美、石本好典、田中聡一、岸本好弘、多賀健次、藤井益夫、北脇泰久、井塚哲夫、田村克哉、平通茂、菊池久美、大内裕子、児玉浩晃、増田行夫、徳永行雄

なお、現地調査では佐藤工業、日本道路公団大阪建設局長浜工事事務所の方々の協力があった。

7．本書は、第一章を田中勝弘、第二章を石原道洋が執筆し、編集は田中が当った。

8．なお、巻末に第四章として、昭和53年度に実施した黒田長山遺跡群中で、唯一性格の異るイ号墳、第三章として、昭和50・51両年度に実施した円光寺遺跡（当初、仏光寺遺跡として扱ったが、当該地の字名を詳細に検討した結果、正当な字名を遺跡名に附した）を掲載した。

総　目　次

序

例　言

はじめに……1

第一章　木ノ本町黒田長野古墳群……3

第二章　木ノ本町黒田東山遺跡……53

第三章　近江町円光寺遺跡……65

第四章　余呉町黒田長山遺跡群イ号墳……73

おわりに……82

はじめに

黒田長野・東山古墳群は、日本道路公団が実施した北陸自動車道建設工事中に発見されたものであるが、自動車道は昭和55年開通に向って工事が急速に進展している状況下にあった。特に、当該地が湖北農業用水幹線路の改修部分に当っており、翌年の作付け時期と工期との調整が問題となった。従って、文化財の発掘調査体制、調査期間等の点で困難を極めたが、日本道路公団の要請によって、急拠、事前調査を実施したのであった。

調査は、原因者である日本道路公団が費用を負担し、昭和53年度事業として、滋賀県教育委員会の指導のもとに、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。

なお、調査に当り、当遺跡近辺で、余呉町黒田長山遺跡群、伺町桜内遺跡、高月町井口遺跡、虎姫町丸山古墳等の発掘調査を担当されていた方々の多大な援助をいただいた。また、当該工事を担当していた日本道路公団大阪建設局長浜工事事務所、佐藤工業等の関係者の方々には種々御協力していただいた。ここに記して感謝の意を表します。

(田中　勝弘)

第一章　木ノ本町黒田長野古墳群

目　　次

第一章　黒田長野古墳群

1．位置と環境……9

2．調査結果……11

イ）第1号墓……11
Ⅰ．調査前の状況……11
Ⅱ．遺　構……11
Ⅲ．出土遺物……12
ロ）第2号墳……14
Ⅰ．調査前の状況……14
Ⅱ．墳丘規模……14
Ⅲ．墳　丘……16
Ⅳ．横穴式石室……18
Ⅴ．遺　物……21
Ⅵ．まとめ……23
ハ）第3号墳……23
ニ）第4号墳……23
Ⅰ．調査前の状況……23
Ⅱ．墳丘規模・形状……23
Ⅲ．墳　丘……27
Ⅳ．主体部……29
Ⅴ．遺　物……29
ホ）第5号墳……30
Ⅰ．調査前の状況……30
Ⅱ．墳丘規模・形状……31
Ⅲ．墳　丘……33
Ⅳ．主体部……35
Ⅴ．遺　物……36
Ⅵ．まとめ……38

3．考　察……38

イ）湖北地方の横穴式石室……38

ロ）方墳の問題点……42

Ⅰ．黒田長野古墳群第４・５号墳について……42

Ⅱ．分布の状況Ⅰ（丹後・丹波両地方を例に）……43

Ⅲ．分布の状況Ⅱ（畿内を中心に）……45

Ⅳ．分布の状況Ⅲ（近江地方例）……49

Ⅴ．方墳の性格（近畿地方を中心に）……49

Ⅵ．方墳の問題点……50

挿図目次

図１．黒田長野古墳群位置図……10

〃２．〃　地形測量図……10・11

〃３．〃　第１～３号墳地形測量図及びトレンチ配置図……12

〃４．〃　第１号墓遺構実測図……13

〃５．〃　〃　出土遺物実測図……14

〃６．〃　第２号墳墳丘基底地山整形状況図……15

〃７．〃　〃　墳丘断面土層図……15

〃８．〃　〃　墳丘及び石室築成工程図……16

〃９．〃　〃　横穴式石室実測図……19

〃10．〃　〃　出土須恵器実測図……21

〃11．〃　〃　出土鉄製品実測図……22

〃12．〃　第４・５号墳地形測量図及びトレンチ配置図……24

〃13．〃　第４号墳墳丘断面土層図……24・25

〃14．〃　第５号墳墳丘断面土層図……24・25

〃15．〃　第４・５号墳トレンチ状況図……26

〃16．〃　第４号墳墳丘築成工程模式図……28

〃17．〃　〃　墳丘築成工程図……28

〃18．〃　〃　主体部(？)実測図……29

〃19．〃　〃　壺棺(？)出土状態実測図……29

〃20．〃　〃　出土土師器壺実測図……30

〃21．〃　〃　墳丘築成工程模式図……34

〃22．〃　〃　墳丘築成工程図……34

〃23．〃　〃　主体部実測図……35

〃24．〃　〃　出土遺物実測図……36

図25．黒田長野古墳群第４・５号墳墳丘復元図……37
〃26．湖北地方横穴式石室変遷図……39
〃27．近畿地方における主要方墳分布図……48

図版目次

図版一．(上)黒田長野古墳群航空写真
(下) 〃 第５号墳からの遠望（北を望む）
〃 二．(上) 〃 第１号墓遠景
(下) 〃 〃 近景
〃 三．(上) 〃 〃 遠景（除去後）
(下) 〃 〃 近景（ 〃 ）
〃 四．(上) 〃 第２号墳全景（南より）
(下) 〃 〃 横穴式石室全景（東より）
〃 五．(上) 〃 〃 〃 〃（北より）
(下) 〃 〃 〃 近景（北より）
〃 六．(上) 〃 〃 〃 〃（東より）
(下) 〃 〃 〃 〃（東より、閉塞石除去後）
〃 七．(上) 〃 〃 閉塞状況（南より）
(下) 〃 〃 〃（東より）
〃 八．(上) 〃 〃 奥壁石積み状況（北西コーナー）
(下) 〃 〃 玄室東壁遺存状況
〃 九．(上) 〃 〃 羨道東壁
(下) 〃 〃 〃 石積み状況（北より）
〃 一〇．(上) 〃 第４・５号墳全景（北東より）
(下) 〃 第４号墳全景（北東より）
〃 一一．(上) 〃 〃 主体部(？)(発掘前)
(下) 〃 〃 〃（発掘後）
〃 一二．(上) 〃 〃 壺棺(？)（発掘前）
(下) 〃 〃 〃（発掘後）
〃 一三．(上) 〃 〃 ＳＥトレンチ（東より）
(下) 〃 〃 〃（西より）
〃 一四．(上) 〃 〃 ＳＷトレンチ（北より）
(下) 〃 〃 〃（北より）
〃 一五．(上) 〃 第５号墳全景（北東より）
(下) 〃 〃 主体部（南より）
〃 一六．(上) 〃 〃 〃（東より）

図版六.（下）黒田長野古墳群第５号墳主体部近景（東より）
〃 七.（上）　〃　〃　墓壙（北より）
（下）　〃　〃　〃　（西より）
〃 八.（上）　〃　〃　鉄剣出土状態（西より）
（下）　〃　〃　鉄鏃出土状態（東より）
〃 九.（上）　〃　〃　ＮＥトレンチ（北より）
（下）　〃　〃　ＳＥトレンチ（北より）
〃 一〇.（上）　〃　〃　ＳＷトレンチ（北西より）
（下）　〃　〃　ＮＷトレンチ（南東より）
〃 一一.　〃　第１号墳出土遺物
〃 一二.　〃　第２号墳出土遺物
〃 一三.　〃　第４・５号墳出土遺物

木之本町黒田長野古墳群

田中　勝弘

1．位置と環境（図1・図2・表1）

番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡の概要	年代	備考
1	塚谷古墳	余呉町今市	山麓	円墳一基		
2	瓢塚古墳	余呉町今市	山麓	円墳一基		
3	松田遺跡	余呉町東野松田	平地	須恵器(墨書土器有り)，土師器	8世紀	
4		余呉町文室	台地	土師器		
5	ナラ遺跡	余呉町国安	平地	須恵器		
6		余呉町	丘陵	前方後円墳か？		
7	銚岡遺跡	余呉町中之郷	台地	須恵器		
8	笠上遺跡	余呉町中ノ郷	山麓	近世墓跡，土拡墓(勾玉，管玉出土)	4世紀，15世紀	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」昭49
9	日植塚古墳	余呉町中ノ郷大将軍	平地	円墳一基		
10	始親古墳	余呉町中ノ郷始親	山麓	円墳一基(直葬墓，須恵器，鉄製品出土)	5世紀末	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ」昭53
11	余呉湖岸遺跡	余呉町川並	湖岸から湖底	縄文式土器，埋没林	縄文後期	
12	蔵方遺跡	余呉町下余呉蔵方	平地	須恵器	8世紀	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」昭51に出土遺物実測図有り
13	崩れ谷古墳	余呉町下余呉崩れ谷	山麓	須恵器		
14	北畑古墳群	余呉町下余呉北畑	山麓	円墳数基(須恵器，勾玉，金環出土)	6世紀後半	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」昭51に出土遺物実測図有り
15	坂口北遺跡	余呉町坂口	台地	須恵器・土師器		
16	大門古墳	余呉町坂口大門	山麓	円墳一基(横穴式石室)	6世紀	
17	坂口遺跡	余呉町坂口	台地	竪穴式住居跡3基以上，近世神社跡(弥生式土器出土)	3世紀	昭51調査
18	上ノ山古墳群	余呉町坂口上ノ山	山麓	円墳7基(横穴式石室，直葬墓，須恵器，勾玉，管玉，丸玉出土)	6世紀初頭～7世紀初頭	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」昭51
19	黒田長山古墳群	余呉町坂口長山	丘陵尾根	円墳　基(直葬墓，短甲，鉄鉾，鏃，斧出土)，方形周溝墓群	5世紀末，3世紀	昭52・53調査
20	桜内遺跡	余呉町坂口桜内	台地	竪穴式住居跡，方形周溝墓(弥生式土器，須恵器出土)	3世紀，6世紀末	昭52以降継続
21	黒田長野古墳群	木之本町黒田長野	山麓			今回報告
22	西山古墳群	余呉町坂口	丘陵尾根	円墳6基(横穴式石室)以上	6世紀	
23	黒田古墳群	木之本町黒田森崎山	山頂	円墳6基		
24	祝山遺跡	西浅井町祝山	平地	須恵器・土師器		
25	大川河口遺跡	西浅井町塩津浜	湖岸から湖底	陶器類	鎌倉～室町	

表1．黒田長野古墳群位置図及び周辺主要遺跡分布図

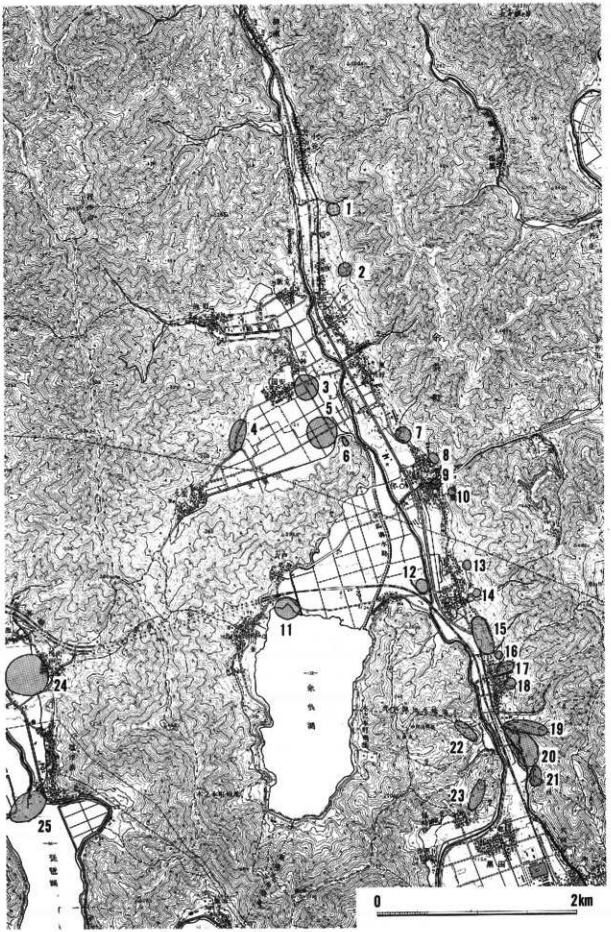


図1．黒田長野古墳群位置図

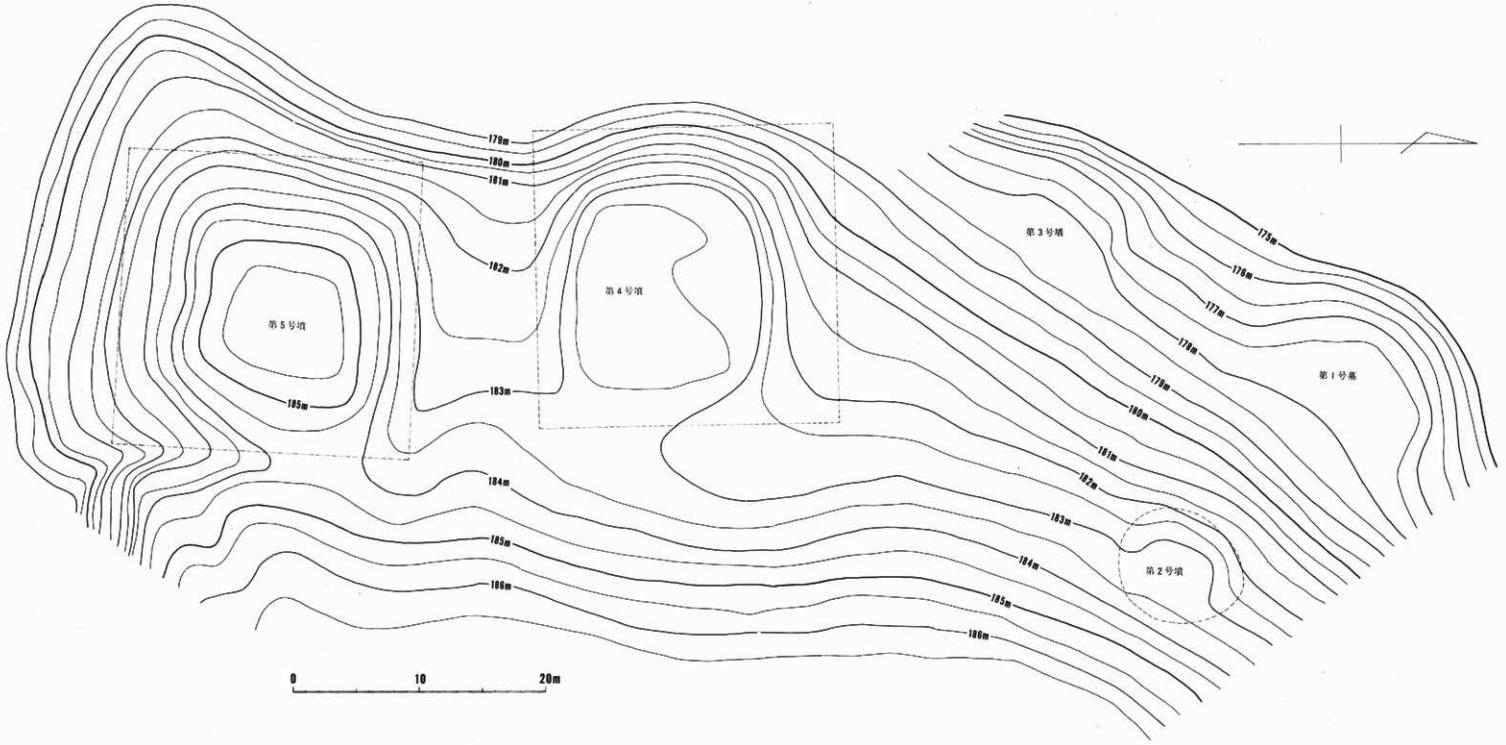


図２．黒田長野古墳群位置図

黒田長野古墳群は行政上、滋賀県伊香郡木ノ本町黒田小字長野に位置する。湖北平野は、北部で柳ヶ瀬断層崖の発達する狭長な渓谷に入るが、当古墳群はその南端に位置する。この附近は、東西に行市山の一支脈である大岩山、東に新谷山の支脈が張り出していて、非常に狭い渓谷となっているが、この部分に、西より余呉川、北陸本線、国道365号線（北国街道）が走る。当古墳群はこれらの東側、田上山の西側山麓に立地する。田上山のこの部分は、現在急峻な崖となっているが、周辺地形から、本来もう少し南西方向へ舌状に張り出していたようである。当古墳群は、標高185m附近にあり、平地と約55m程の比高を持つ。丘陵は、急峻な丘陵斜面をのぼると途中緩傾斜を形成しており、再び、標高320mの田上山山頂にのぼるが、古墳群はこの緩傾斜面に立地する。

当古墳群から北方に発達する狭長な断層渓谷には、余呉湖北側に若干の平地がある程度で生産基盤となるべき平野部は非常に限定された状況にある。これに反して、特に古墳時代遺跡が比較的数多く見られる。現在のところ、長野古墳群より古式の古墳は見られないが中期末には、当古墳群の北隣り丘陵尾根上で、武具、武器のみを出土した15基の小円墳群（方墳1基含む）があり、中之郷鉛練においても、時期のこれに近い古墳が発見されている。後期古墳群においては、長野古墳群を含めて9カ所に見られる。特に、余呉町坂口上ノ山古墳群は、横穴式石室採用前の時期の古墳が含まれ、後期群集墳の非常に早い出現を見ている。当古墳群の立地する田上山西側裾部には国道365号線が走る。これは旧北国街道であり、古代より、美濃関が原、東海尾張に通ずる北国脇往還道、湖北町尾上から大津への湖上交通路を経て畿内に至る両交通路と結び、日本海地方越前武生に至る幹道であったと考えられるものである。狭長な渓谷における諸遺跡の分布は、この街道の存在との非常に密接な関係の上で理解できるものと思われる。従って、日本海地方への交通路の門戸的な位置に分布する黒田長野古墳群の性格の解明は重要な歴史的意味をもつものといえよう。なお、東山遺跡は、当古墳群の南側丘陵尾根に位置している。

2．調査結果

イ）．第1号墓

Ⅰ．調査前の状況（図3）

全体的に緩傾斜面の立地条件にある。標高177mから178mの間にあって、北西方向に小さく舌状に張り出した平坦地が見られた。等高線は、177.5mから175mまでの間で摺曲線を描く。平坦地は、下底15m、上底7m、高さ7m程の台形状で、その中央に、4m×3m程の玉子形の被掘壙があり、内部に焼土、炭、灰、腐植土等が多量に混入していた。調査は、まず被掘壙内の埋土の除去から開始し、次いで、トレンチにより、舌状平坦部の盛土状況を観察することとした。

Ⅱ．遺　構（図4）

被掘壙内の埋土を除去した結果、壙は、長軸4.2m、短軸3.1mの卵形を呈し、深さ50cmあった。トレンチによる舌状張り出し部の土層観察では、人為的な盛土は認められず、従って、壙は、自然地山を穿ったものであることが明らかになった。また、舌状張り出し部が、特に、地山面の整形によって形成されたという根拠も見出すことができなかった。

土壙　土壙は卵形で、長軸はN65度Eにある。長軸の長さは、上端で4.2m、下端で3.3m、短軸は上端で3.1m、下端で2.4mを計る。深さは46cm～50cmで、東方に向って、5cm～10cm程傾斜している。下底面は平坦で、石組みが見られた。

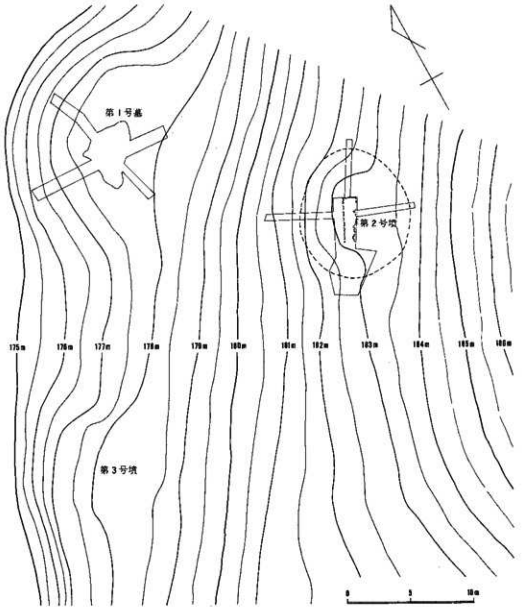


図3．黒田長野古墳群第1～3号墳地形測量図及びトレンチ配置図

石組　石組は、長さ30cm～45cm、幅30cm、高さ20cm～25cm程の割石5個を一字形に置いている。およそ、土壙の長軸に直交する方向で4石、並行する方向で1石が遺存しており、北側の2石には詰め石3個が認められた。この詰め石により、配列された5石の上面のレベルがほぼ整えられた状況にあるが、内外の面は、特に、整えられた様子はない。石組付近からは、須恵器の高台付埦2点、皿3点、壺1点等が出土している。

Ⅲ．出土遺物（図5）

須恵器では、高台付埦2点、皿3点、壺1点、土師器壺1点が出土している。いずれも原位置を保っていないが、石組附近から集中的に出土している。

皿（1～3）は、3点とも同じタイプで、口径12.8cm～14.5cm、器高2cm～2.3cmを計る。体部と底部との境界は明瞭でなく、外底面はヘラ切り後、タタキ板でたたくか、荒く削っていて、未調整である。口縁部は大きく外傾している。端部附近で内外両面より押えるため、端部が肥厚したようになっている。また、いずれも、胎土に若干の石

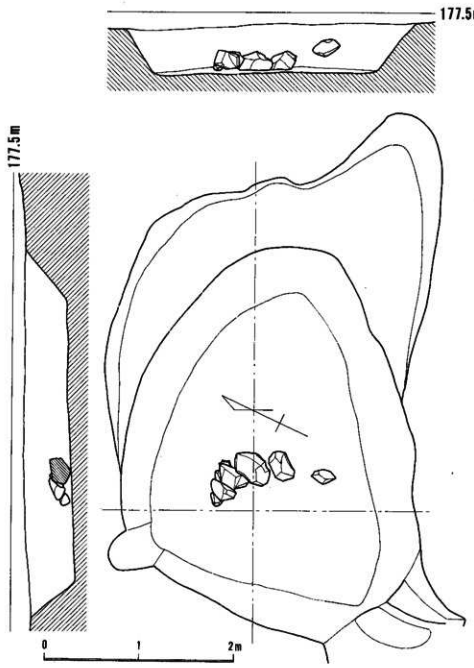


図４．黒田長野古墳群第１号墓遺構実測図

粒が混り、淡青灰色を呈している。焼成は良好である。

埦（４・５）は、口径11.7cm、器高4.6cmの小振りのもの(4)と、口径14.5cm、器高4.9cmのやや大振りのもの(5)とがある。小型のものは、体部が直線的に開き、口縁端部をわずかに外反させている。高台は、横断面が逆台形を呈し、高さ0.3cmと低い。体部直下に貼り付けられている。大型のものは、直線的な体部と、その直下に高台が付くことは小型品と同様であるが、口縁端部はわずかに内反し、横断面逆台形の高台は高さ0.5cmとやや高く、タタミ付き部分が凹む。また、体部下端はヘラ削りして調整している。

壺は、口縁端部が上下に肥厚し、その外面に二条の凹線が走る。

以上の須恵器のうち、埦の大型品は平城宮跡ＳＤ650Ⓑに類品がある。ＳＤ650Ⓐや長岡京跡ＳＤ51③出土のもの

に比べて、高台の外傾が全くなくなっており、口縁端部の変化もほとんど見られなくなっている。皿については、体部の外傾度は平城宮跡ＳＤ650ＡとＳＤ650Ｂにさほど差はないが、ＳＤ650Ａでは口縁部に面取りの見られるものがあり、これにほぼ近い長岡京跡ＳＤ51にも同様の特徴を持つものが見られるところから、古い要素とすることができよう。当遺跡のものは、口縁端部を丸くおさめており、やはり、端部に面取りがなく、内折させた口縁部を持つ類品のある平城宮跡ＳＤ650Ｂに近いタイプといえよう。平城宮跡ＳＤ650Ｂは９世紀後半代に比定されており、当遺跡の出土品もこのころのものとすることができよう。また、土壙及び石組みについても、これら須恵器類が示す年代のものとできる。

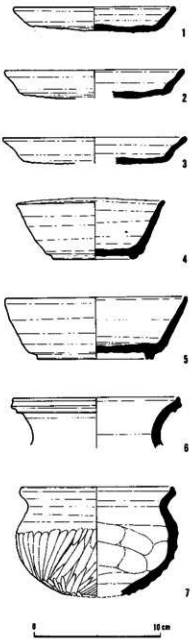


図５．黒田長野古墳群第１号墓出土遺物実測図

ロ）．第２号墳

Ⅰ．調査前の状況（図３）

標高182ｍから184ｍの間で、北西方向に小さく舌状に張り出した部分があり、その平坦部に陥没壙があった。事前の地形測量（50cm等高）においては、等高線は円形を呈さなかったが、およそ、径８ｍの円墳で、平坦部の陥没壙は、横穴式石室の天井石が抜き去られた後の石室内への土砂の流入痕を示すものと考えられた。調査は、まず陥没壙の埋土除去作業から開始し、石室の壁面の追求を行なった。墳丘の築成状況については、石室に直交する方向と並行する方向に設定したトレンチの断面土層を観察することとした。

Ⅱ．墳丘規模（図６・図７）

墳丘裾部の確定は、石室に直交する方向に設定した東・西両トレンチ、並行する方向に設定した北トレンチの断面土層を観察することによって行なった。

東トレンチでは、幅1.8ｍ、深さ0.3ｍの凹所が自然地山面を切り込んで見られた。墳丘築成のための盛土はこの凹所には及んでおらず、凹所内に堆積した黒褐色土以外はすべて表土であり、従って、墳丘東部における墳丘端部をこの凹所の最深部に求めた。

西トレンチでは、東トレンチのような凹所は認められなかったが、自然地山面に10cm足らずのわずかな段差のある部分が認められた。墳丘盛土の大半はこの段差部分に及んでいなかったが、盛土最底の一層が、石室を構築すべき墓壙肩部よりこの段差上端部まで及んでおり、墳丘盛土の流出をも考慮して、この段差部分を墳丘の西端とした。

東西両トレンチにより求めた墳丘東西両端の水平距離は8.8ｍを計る。

北トレンチでは、自然地山面は、墓壙肩部より幅1.6ｍの平坦部を設け、その外側で、幅2.2ｍにわたって、深さ0.4ｍ程掘り凹めている。墳丘の盛土は、石室壁体を構築した後の墳形を整えるための最終盛土がこの凹所の大半を覆っているが、凹所の外側肩部より内側幅0.7ｍの間には及ばず、かつ、凹所の外側立ち上りと盛土に

よって、深さ0.25mの凹所を新たにつくっている。この新しい凹所は地山面の掘り込みの最深部に近く、また、墳丘盛土が凹所より外側に及んでいないところから、この凹所を以って、墳丘北端と考えた。

墳丘の南端は石室の開口部に当り、特に顕著に墳丘端部を示す地山の整形は認め難かったが、石室入口に羨道からハの字形に開く石列が認められ、また、東側で墓壙東壁の南端部が認められたことにより、墳丘の南端を決定し得た。北トレンチでの所見と合せて、墳丘の南北径は10mを計測することができる。

以上により、墳丘の平面規模は東西8.8m、南北10mで、正円形を呈さず、墳丘の北側、石室の後背が張り出した卵形を呈していることになる。

墳丘の高さは、石室の天井石が欠失していて、本来の高さは不明であるが、玄室の壁面及びその後背の盛土がほぼ遺存していた。墳丘高は、古墳が山腹の緩斜面に築造されているため、山側と谷側で異る。さらに、山側は、石室を構築すべき墓壙が0.95mと深く、また東側墳丘端の造成も深さ0.3m程の凹所をを設ける程度であって、東西両端のレベル差は1.63mにも及んでいる。従って、墳丘の遺存高も、山側（東側）で0.5m、谷側（西側）で2.1mとその差が非常に大きくなっている。

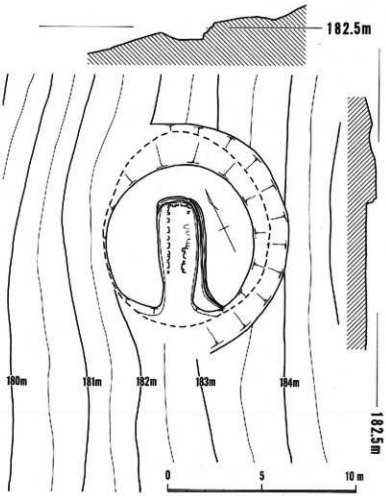


図6．黒田長野古墳群第2号墳墳丘基底地山整形状況図

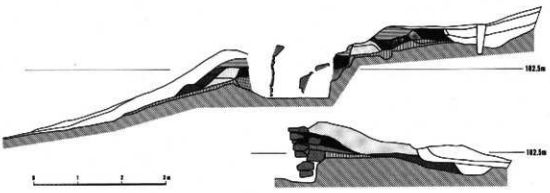


図7．黒田長野古墳群第2号墳墳丘断面土層図

Ⅲ．墳　　丘（図７・図８）

墳丘の築成は石室壁体の構築と不可分の関係にあるため、両者を合せた記述をする。また、まず、３カ所に設定した各トレンチの断面土層の観察結果を記し、次いで、各々の相互の関連から、墳丘の築成工程を述べることにした。

東トレンチ　玄室の東壁は、石室が緩傾斜面に並行して構築されているため、土圧等により、ほとんど原位置を保持した石材がなかったため、墳丘の盛土と石室壁体の構築との関係を直接把握することはできなかった。

東トレンチでは、まず、自然地山面が、深さ0.95ｍにわたって掘り下げられ、墓壙を形成している。壙壁は上・中・下の三段に掘削され、深さは下段が0.4ｍ、中段及び上段が0.25ｍを計る。また、墓壙外方に、幅1.9ｍ、深さ0.3ｍの溝を穿って墳丘の端部を整えている。墓壙と墳丘端の溝との間は自然緩傾斜面をそのまま残している。

盛土は、まず、墓壙肩部から墳丘端の溝の内側肩部にかけて、厚さ５cm～15cmの単一層が認められる。次いで、墓壙の中段を埋めつくす状態で、やはり単一層がある。これは、墓壙上段肩部にまで及ぶが、墓壙上段を埋めつくさず、新たに、墓壙上段を形成している状況にある。この上方に、版築状に、４層の薄い土層が認められた。この土層により、墓

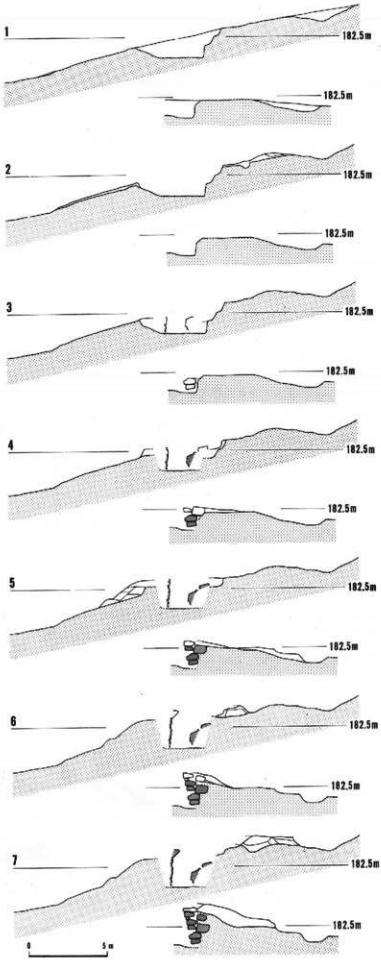


図８．黒田長野古墳群第２号墳墳丘及び石室築成工程図

墳が完全に埋っている。墓壙内側の盛土は、東トレンチでは、墓壙の深さ以上には遺存していなかった。墓壙外側では、墳丘端の溝までの間に、さらに3層の盛土が認められた。各土層は上下に堆積せず、順次、内側の土層を外側から押える様に積まれている。

西トレンチ　まず、自然地山面が深さ0.34mの深さで掘り込まれ、墓壙を形成している。東トレンチにおける墓壙上段肩部との幅は2.74mを計る。また、下段肩部との幅は2.0mである。墓壙肩部から墳丘端までは自然緩傾斜面をそのまま残している。

盛土は、まず、墓壙肩部から墳丘端までの間に、厚さ8cm程の単一層がある。この土層により、墓壙は0.44mと深さを増している。この墓壙内に土砂が充填される。この段階で石室壁体の石材は三段を数える。次いで、石室壁体の後方で、幅約1.2m～1.3m、厚さ20cm程にわたって、3層の盛土が確認できた。この3層は石室壁体石材の控え積みではなく、控え積みの外方からの押えのために盛られたものと考えられる。この3層の外側に、ほぼ同じレベルで、さらに3層の盛土が確認できた。土層は上下に堆積しており、全体として、外側から押えるように積まれている。墳丘の形状を整えていくための盛土と考えられる。なお、この段階で、石室壁体の石材は、さらに二段が加えられている。以上の盛土全体を覆って、さらに、厚さ20cmの盛土が幅約1m程にわたって認められた。この盛土に対応して、石室壁体の石材は二段である。

西トレンチにおける墳丘盛土は以上までで、これらの上方は表土層の堆積を見るにすぎなかったが、石室壁体の石材は、さらに一段分が遺存していた。

北トレンチ　自然地山面の整形は、まず、深さ0.56mの墓壙を穿ち、幅1.6mの自然平坦面を残して、その外側を幅2.2m、深さ0.4mにわたって掘り凹めて墳丘の基底面をつくっている。墓壙壁は、下方0.35mと上方0.21mとでその傾斜角度をかえている。

盛土は、墓壙の下段を埋めた状態でまず一層が認められる。石室壁体は、この一層の間で3段まで積んでいる。次に、この土層を上方から押え、墓壙の上段に一端をすえた状態で石材が置れ、その後方を厚さ14cm、幅1.2mにわたる盛土がなされている。石材は石室壁体の石材の後方に接して置かれており、控え積みの役目を負せているものと思われる。この段階で石室壁体の石材は二段積まれる。この上方には、控え積み石材をも覆って、厚14cm、幅1.2mにわたる盛土があり、これに対応して石室壁体の石材が一段積まれている。さらに、この上方で、石室壁体石材の後方に接して石材が控え積まれ、その外側を厚さ20cm、幅1.1m程の盛土を行っている。

石室壁体の控え積みとしての盛土の遺存は以上までであるが、壁体の石材としてはさらに一石の遺存を見ている。以上の盛土後に、その外側に、墳丘端部までの盛土が2層まで確認できた。

墳丘築成工程　以上が各トレンチにおける断面土層観察の所見であるが、各々相互の関係から、墳丘全体の築成過程をまとめておくことにする。

①地山整形の段階。石室を構築すべき部分に、南側を解放させた墓壙を掘り込む。墓壙は、長さ約6m、南端入口幅及び北端で1.5m、玄室中央附近で幅2mを計り凵形を呈する。墓壁は東側で三段掘り、北側で二段掘り、西側で一段掘りである(これは、自然地山面の傾斜による高低差により生じる)。次いで、山側の2分の1の範囲で溝を掘り、墳丘端部を決定する。溝は、谷側で解放されている。溝と墓壙との間は自然地山面を掘り残し、墳丘盛土の基底面としている。

②石室壁体構築の段階。この段階は、さらに、4段階に分けて石室壁体の構築及び墳丘の築成を行なっている。

②－1　墓壙の一段目の高さまで、石材を積み上げ、石材の後方、壙壁との空所を充塡している。壁体は、奥

壁、西壁とも三段まで積み上げている。

②－2　東及び北側で墓壙の二段目の高さまで石材を積み上げ、壙壁との間を充塡する。西側では、東及び北側の墓壙の二段目の高さまで墳丘を盛り上げ、壁体を構築した後、盛土と壁体石材との空所を充塡している。北トレンチでは、壁体石材の後方に控え積みの別の石材を墓壙の二段目にすえ置き、その後方を盛土して押えている。この段階で、壁体石材は、奥壁で二段、西壁で二段まで石材を積み上げている。

②－3　東側では、三段目墓壙壁の高さまで壁体の石材を積み上げ、壙壁との空所を充塡する。北壁では、壁体の石材を東側と同様の高さまで積み上げた後、その後方に石材の控え積みを兼ねて墳丘の盛土をしている。西側では、墳丘の盛土を東側及び北側の壁体の高さまで積み上げた後に壁体の石材を積み上げ、その後方の空所を充塡する方法をとっている。壁体の石材は奥壁で一段、西側で２段の積み上げが認められる。

②－4　東西両トレンチでは明らかでないが、北側では、壁体の石材を二段積み上げ、その後方に控え積みの石材を置き、さらにその外側を盛土している。東側では、壁体の石材及びその控え積みの土層は遺存していなかったが、３層にわたる墳丘の盛土が遺存していて、墳丘の盛土後、壁体の石材を積み上げ、その後方の空所を充塡していた様子がうかがえた。西側では、壁体石材が一段分のみ遺存していた。

③墳丘整形の段階。　この段階の盛土は、東側及び北側で一部が遺存していた。東側では②－４の段階の盛土が墳丘築成及び墳形を整えるための盛土を兼ねているものと考えられる。北側では、②－４までの段階の盛土は、墳丘端に及ばず、明らかに石室壁体の控え積みのための盛土であることが明らかである。この段階の土層の上方に、墳丘端に及ぶ二層の盛土が認められたが、この土層が天井石上面の被覆をも兼ねた墳形整形のための盛土と考えられる。西側では、石室壁体の控え積みが②－２の段階以降、墳丘の築成、壁体の石材の積み上げ、石材後方の空所の充塡という過程を経ているため、壁体の構築と同時に墳形を整えているものと思われる。

以上、自然地山面の整形から墳形の整形まで、およそ６段階の過程が考えられる。特に、②の段階では、各段階における石室壁体、盛土層のレベルが東・北・西ともほぼ一致しており、この段階での各小段階は石室及び墳丘築成の時間的推移を表わしているものと考えられる。また、東・北・西三方での盛土法の相違は、墳丘の基底面として自然地山面の傾斜をそのまま残し、山側と谷側とで1.63ｍに及ぶ高低差を残していたことにより生じたものであろう。たとえば、墳丘西側において、まず、墳丘の盛土を行なって固め、石室壁体の石材を積み上げた後に、その後方に生じている空所を埋めるという方法を取っているのは、山側からの押圧により、墳丘盛土及び石室壁体の倒壊を防止するための工法と考えられるのである。

Ⅳ．横穴式石室（図９）

内部主体は右片袖の横穴式石室である。石室の軸線方位はＮ25度Ｅにあり、南側に開口している。また、軸線は、自然傾斜面に対して並行している。また、天井石はすでに無く、壁体も玄室東壁の石材の大半が土圧等により、石室内側に下落した状態であった。しかし、玄室の奥壁、西壁、羨道の東西両壁については良好な遺存状態を示していた。石室床面については、ほぼ旧状を保っていたが、副葬品で原位置を保持していたものは出土しなかった。

規模・形態　　全長4.15ｍ、玄室長2.66ｍ、玄室幅0.94ｍ、羨道長1.49ｍ、羨道幅0.7，袖の長さ0.24ｍを計る。石室の高さは、玄室で遺存高1.23ｍ、羨道で0.9ｍである。壁面の傾斜は玄室奥壁及び東壁ともに、垂線に対して11度内傾している。

石室の平面形態については、袖のない東壁は、玄室から羨道までほぼ一直線である。西壁については、玄室部分は不明であるが、羨道部分は、入口で外側へ開く。奥壁は、玄室東西両壁と接する部分で、両壁石材をまたぐ

ように斜めに石材が置かれていて、外側へ弯曲した形となっている。羨道入口外側は、入口からハの字形に開く石列があり、入口両側を整えている。石列の外方端の幅は2.4mの広さを持つ。奥壁から石列までの長さは4.8mを計る。

石室床面はほぼ水平で、玄室と羨道との境界を示す造作は認められなかった。

構造　石室に使用している石材は、各壁面とも比較的小型の板状の割石を利用している。壁面となる石材の小口面は特に加工することなく、割削面あるいは自然面をそのまま使用している。

（西壁）　最下底に、厚さ10cm程、長さ20cm～50cm程の比較的形の整った板状の石材を9石並べ、石室の西側ラインを整えている。これに用いる石材は、壁面となる小口面の整ったものを利用している。この最下底9石の石列の長さは奥壁から3.35mまでで、これより外側では、最下底の石材は階段状に積み上げられ、石室外方の入口両袖の石列につないでいる。奥壁との関係では、玄室側の石材が奥壁側の石材を内側から押えるように「字状に配列されている。

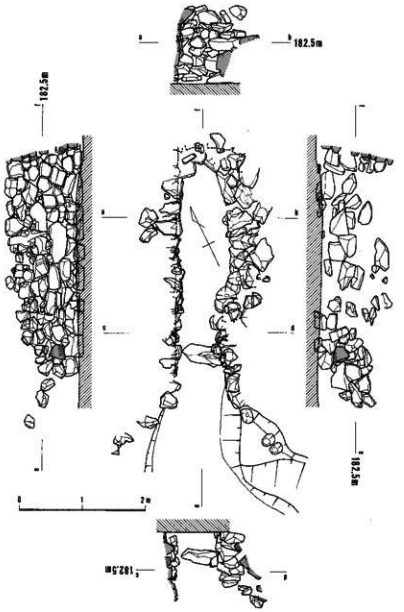


図9．黒田長野古墳群第2号墳横穴式石室実測図

最下底より上方の壁体の構築法については、Ⅲ．墳丘の項で盛土との関係で4回に分けて、段階的に構築されていることが判明したが、各段階で石材の積み上げ順序等が若干異る。隣接する石材の重なり具合等から読みとれる壁体築成法を順序を追って記述する。

①　奥壁に接する部分で、縦二列に階段状に3石まで積み上げる。奥壁側一列は、下段石材が玄室と奥壁との両石材にまたがるよう斜め積みした石材を外側から押え、中・上段の石材は奥壁石材を西側から押えるように、すなわち、イ→ロ→ハの順序で積み上げ、奥壁とのコーナーをつくっている。

②　次いで、羨道に当る部分を二段積みする。この部分で、上・下各段における隣接する石材はほとんど重なりなく並べられている。また、上段列は羨道入口両袖の石列につながる。

③ ①及び②の石積みと同じ高さまで、両石積みを上から押えるように、2～3段の石材を積み上げて埋める。この場合、上段中央の石材は長さ65cm、厚さ25cm程の他の石材に比べて非常に大型の石材であり、かつ、両側の石材を上から押えた状態にあるところから、この段階の石積みは、前後両側から中央に向って積まれていることがわかる。

なお、①～③の壁体構築段階は、Ⅲ. 墳丘の項における墳丘築成工程の②－1に対応する。また、この段階を①～③の三小段階に区別し得たのは、隣り合う石材の重なり合いがこの部分で顕著に認められたからである。

④ 墳丘築成工程における②－2に対応する部分で、一段積みされている。下方石材との間に長さ10cm前後、厚さ10cm弱程の割石を詰め石とし、下方の2コの石材にまたがるように並べられている。

⑤ 墳丘築成工程②－3に対応する。およそ、2～3段積みされている。下方の2コの石材にまたがるように置かれているが、羨道に当る部分では板状の石材を用いず、角測りの石材を用い、下方の2石にまたがるというより、はさみ込むようにして積まれている。このことは、玄室部分の石材が板状のもので、下方の2石に横架するように積まれていることと顕著に相違する。両者の接する部分で、玄室側石材が羨道側石材を上方から押えるように積まれているところから、まず羨道側が構築され、次いで玄室側を積むという順序が考えられる。

⑥ 墳丘築成工程②－4に対応するが、東壁では、数石、一段のみが遺存していたにすぎない。

以上が西壁の構造及び築造過程であるが、その特徴として最も顕著なことは、西側は玄室と羨道とを区別しない無袖のものであるが、東壁に対応する羨道部分の石材の積み方と玄室部分の積み方とが、最下底石材を除いて顕著に相違することであろう。そして、羨道部分の構築が玄室部分に先行しており、このことは、羨道→玄室の構築順序があって、明らかに、東壁における羨道壁を意識した結果と考えられる。

（奥壁） 奥壁も最下底の石材を並べた後、墳丘築成工程の②－1～4の各段階に応じた積み方がなされている。

① 西壁①の段階の奥壁側の石積みに対応して、最下底石材上にコーナー石、それを上から押えてさらに奥壁石材1石を置く。次いで、この両石にまたがるように、コーナー石材を置く。

② 西壁③の段階に対応して、三石が一段積みされる。三石は、各々東側に隣接する石材を上方から押えており、また、西端のものが他に比べて小型の石材を用いているところから、石室東壁においても、西壁同様の積み方、①の段階があるものと考えられる。

③ 西壁④に対応する部分で、二段積み、東端のみ一段積みしている。二段積み部分は下段に小形石材4石、上段は大形のものを2石使用している。また、上段石材は、一段積みの東端の石材を上から押えている。

④ 西壁⑤に対応。小形の石材を二段積みしている。

⑤ 西壁⑥に対応する段階で、やや大型の石材が残っている。

以上の他、各段階で、玄室側石材とに横架させているコーナー石材が置かれている。奥壁の特徴としては、鏡石といわれる大型の石材が見られないこと。小石材の中でも、大形のものと小形のものとが交互に積まれていること。各段階で、石材が東側から置かれていること等をあげることができる。最後の点については、西壁に見られたことも考慮して、まず、玄室の奥壁側コーナー部分の構築がなされ、次いで、奥壁及び玄室両壁の構築がなされたという順序のあったことを思わせる。

（東壁） 東壁は、玄門部分を含めて、玄室の壁面石材が、土圧等によって、ほとんど下落しており、わずかに、奥壁と接する部分の最下底石材が遺存していたにすぎない。羨道部分については、玄門を除いて、比較的良好に遺存している。

最下底石材は奥壁より3.2mの位置まで並べ、これより外側では、板状石材を階段状に5段まで積み上げてい

る。この上方に、西壁同様、角割りの石材が、階段状に積んだ石材の高さに応じて１～３段積み上げられている。

東壁羨道部の積み方で西壁と異るのは、上記の石積みの玄室側で、板状の石材が２～３枚重ねで、縦位置に積まれていることである。これは、最下底部分にまで及び、明らかに、空所に詰め込まれた状態であった。この詰め石は、その玄室側の壁体と入口側の壁体とが別々に構築された結果生じた空所を充塡したものと考えられるが、この場合玄室側の壁体は玄門に当るものであると考えるのが適当であろう。詰め石の玄室側で最下底石材が一個遺存しているが、この石材を以って、玄室と羨道の境界とすることができよう。先に記した玄室の長さ（2.66ｍ）及び玄門部の羨道幅はこの石材を基準に測定した数値である。

閉塞石　奥壁より3.25ｍ附近で、長さ65㎝、幅30㎝、高さ28㎝程の石材を用いて羨道をふさいでいた。石材は石室床面より15㎝上方にあり、後世における閉塞である可能性が強い。

Ⅴ．遺　物（図10・図11）

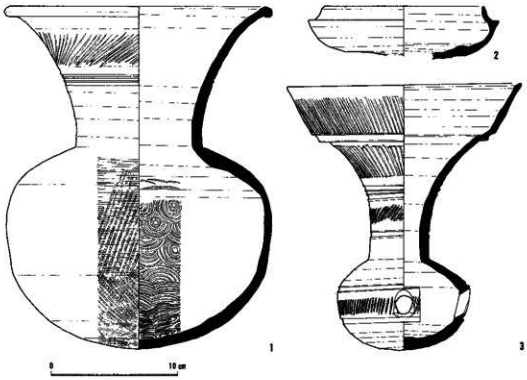


図10．黒田長野古墳群第２号墳出土須恵器実測図

出土遺物は須恵器と鉄器の２種類である。須恵器では、玄室の奥壁附近より甕１点、石室前庭より杯身１点、広口壺１点が出土している。鉄器では、玄室内より刀子２個体分、鉾先状の鉄器２個体分、玄室の床面から鏃３個体分、釘１個体分、不明鉄器１点、石室前庭より鉄鏃が出土している。

須恵器　（壺・図10－１）器高27.1㎝、口縁部径21.3㎝、体部高16.1㎝、胴部最大径21㎝。灰褐色の色調を呈し、0.5～２㎜大の砂粒が比較的多く混入した胎土である。口縁部はゆるやかに大きく外反し、口縁部は玉縁状に、下方へ肥厚する。体部は、最大径が上方に寄り、やや肩の張った形状をしている。調整は、口縁部内外面ともにヨコナデ、体部は、内面を同心円文タタキ板で下から上へタタキ上げ、外面は、タタキを行なった後、ヨコカキ目を施している。施文は、口縁部中程にヘラ描き沈線を３条、その上方に、放射状にヘラによる刻みを施している。

（杯身・図10－２）器高4.2cm、口径12.6cm、受部径15.1cmを計る。口縁部は、途中外方へ屈曲して立ち上る。内傾度は比較的大きい。受部は、ほぼ水平に、外方へ小さく突出する。体部は偏平で、その外底面をヘラ削りしている。胎土は、砂粒を若干含むが細かく、淡黒灰色の色調を呈していて、焼成は良好である。

（甕・図10－３）器高21cm、口径18.5cm、体部高7.2cm、体部最大径10.5cmを計る。胎土に砂粒を若干含み、黒灰色を呈していて、硬質の仕上りを見せている。口縁部は逆ハの字形に、直線的に大きく開く。口縁端部は面取りし、内傾する。口縁部下端は小さく斜下方に突出する。また、この部分に一条の凹線がめぐり、凹線と口縁端部下方１cm程の間に棒状工具による施文が見られる。頸部は口縁部より段を以って移行する。頸部上端に一条、中程に３条、下方に一条の凹線をめぐらす。また、上端と中程の凹線との間に、口縁部同様の施文が施され、さらに、下段には刺突列点文が見られる。体部は、最大径が中程に来るが扁平である。孔は胴部の中程に穿たれ、その上下に各一条の凹線が施される。２本の凹線の間には刺突列点文が施される。下段凹線より下方はヘラ削り調整がなされている。

図11. 黒田長野古墳群第２号墳出土鉄製品実測図

以上の須恵器類のうち、杯身は大阪府陶邑古窯跡群④ＴＫ10に近似する。本古墳のものは、ＴＫ10に比べて口縁部がやや短かく、また、内傾度も大きい。しかし、ＴＫ43より古式であり、両者の中間に位置するものであろう。湖北地方の調査例では、長浜市中山古墳出土Ⅰ類須恵器⑤に類品が見られる。甕は、口頸部が器高の３分の２を占め、口径も体部最大径の1.8倍あって、非常に不安定な形状を呈している。又、口縁部形状等からも海北塚期⑥に近い。湖北地方では、近江町黄牛塚古墳出土のⅠ類須恵器⑦に類品があるが、無文であり、口縁部と頸部との境界の屈曲も弱く、体部最大径がやや上方にきている点等、同類の他器種とともに荒坂期⑧に入るものである。広口壺は、口径と胴部の最大径が等しく、胴部最大径がやや上方にくる。また、放射線状のヘラ刻線による施文が口縁部の上方に見られる点等、やはり甕同様海北塚期のものに類する。

このように、出土した３点の須恵器は、いずれも同形式のものであり、海北塚期、陶色古窯跡群ではＴＫ10とＴＫ47の中間に位置するものである。また、湖北地方では中山古墳期に求めることができよう。

鉄器　（鎌・図11－１）細根式（棘篦被鎌）の三角形鎌である。逆刺はなく、正三角形に近い。長さ5.4cm、幅4.2cm、厚さ0.4cmで、茎は基部で幅0.9cm、厚さ0.3cmを計る。

（刀子・図11－３）１点は背関と刃関のあるタイプである。身の先端を欠き、茎の一部を残す。身の現存長4.7cm、関部での平の幅1.6cm、棟の幅は0.5cmである。茎は幅1.1cm、厚さ0.5cmで、把の木痕が残っている。他は身の先端の破片である。

（鏃・図11－５～７）３個体分あるが全容を知れるものはない。一つは、背の部分と針部に木痕が残りともに直交する方向で木目が走る。二つは、背の部分は直交する木目であるが、針部のものは年輪状の木目を見る。三つ目は針部のみの破片で、直交する木目が走る。いずれも長方形断面を呈している。

（不明鉄器・図11－２・４）４は丁字形を呈するもの。帯金具の鉸具状を呈するが一枚板である。２は同形品２点で、中空の三角錐状品。ともに、遺存長5.5cm、最大径２cmを計る。厚さは0.1cmと薄い。また、ともに外面に木片が残り、うち１点には、木痕の外側に布痕が見られる。

Ⅵ．まとめ

第２号墳は、出土遺物より海北塚期、湖北地方の後期古墳編年では中山古墳期のものであることが判明した。湖北地方では、従来、この時期のものの調査例は中山古墳のみであり、しかも、石室最下段の石材の一部を残すのみであって、石室の規模、形状、構築法あるいは墳丘の築成法等については全く不明であった。今回の第２号墳の調査で、これらの点に関して、中山古墳期の資料を補充することができた。また、遺物の点においても、中山古墳より出土していないものがあった。このことは、湖北地方の後期横穴式石室墳の編年観[3]において、最古式の横穴式石室を持つ湖北町四郷崎古墳から長浜市諸頭山古墳まで、６世紀前葉から７世紀初頭までのほぼ一世紀の間を、６期に区分でき、出土品で比較する限りスムーズな移行を示しているのであるが、石室及び墳丘構造については中山古墳期が欠如していたのである。従って、長野古墳群第２号墳を以って、湖北地方における後期横穴式石室墳の変遷を遺物、遺構の両面からたどることが可能になったといえる。

ハ）．第３号墳

墳丘裾部を若干残すかと思われるものであるが、第１号墓に似た地形を残しており、あるいは第１号墓と同様の遺構を持つものであった可能性がある。

ニ）．第４号墳

Ⅰ．調査前の状況（図12）

第１～３号墳同様、山腹の緩傾斜面に立地する。標高およそ182m附近にあって、明らかに方墳であるという形状を保っていた。ほぼ磁北に一致した方向に辺を整えていた。東辺は山側に当り、整地した痕跡を残していた。西辺は、墳丘斜面から直接崖面に続いており、あるいは、墳丘の西側端部の遺存はあやぶまれる状況にあった。墳頂は平坦で、横断面台形を呈するが、頂部平坦は墳丘規模に比べて広く、頂部は何等かの原因で削平されている可能性が持たれた。調査は、墳頂部平坦面の表土を除去し、主体部を追求することから開始した。次いで、現状での墳丘の四コーナー部分にトレンチを設定し、地山整形痕等を調査することによって、規模及び方墳であることの確証を得ることとした。墳丘の築成法については、各辺に並行したトレンチを墳丘の中心軸上に設定し、その断面土層を観察することによって調査することとした。

Ⅱ．墳丘規模・形状（図13・図14）

各所に設定したトレンチにおける地山整形痕跡から墳丘の規模及び形状を確定した。以下に、各トレンチでの地山整形状況を記述する。

Ｅ－Ｗトレンチ　墳丘の東西軸線に沿って設定したトレンチである。Ｅ－Ｗトレンチでは、幅8.7m、最深部での深さ0.4mの皿状の掘り込みがあった。最深部は溝西端より東側1.8mの位置にある。溝の東側は自然地山面の傾斜に移行する。西側では、幅2.65m程平坦部があり、次いで、幅1.2m程の間で0.4m程の落差がある。以西では、13.5mの間で0.6m程の落差をつくってゆるやかな傾斜となっている。この傾斜面はほぼ平坦で、変化なくそのまま崖面に移行している。この結果、崖面との境界点から溝の西端までの長さは17.03mを計る。また、溝最深部までは18.83m、溝東端までは25.73mである。なお、墳丘盛土は溝の上面には及ばず、西端までであり、

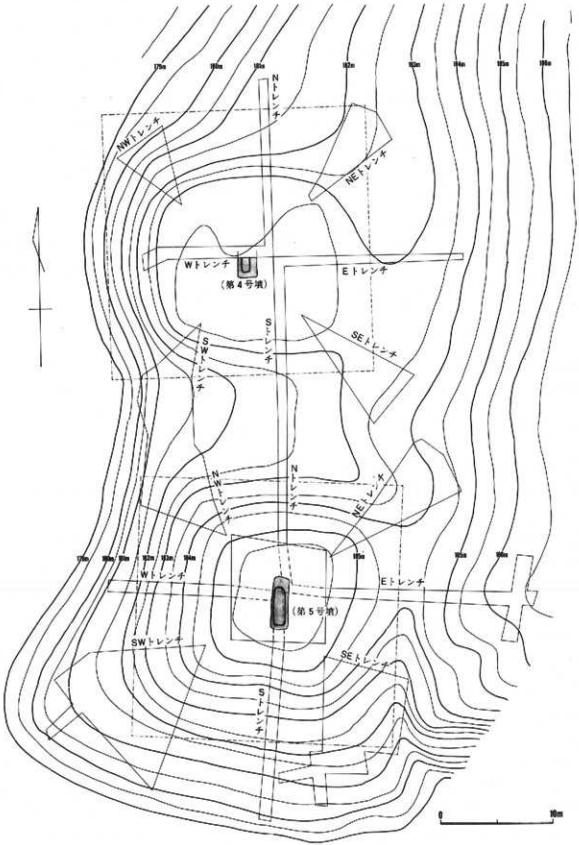


図12. 黒田長野古墳群第4・5号墳地形測量図及びトレンチ配置図

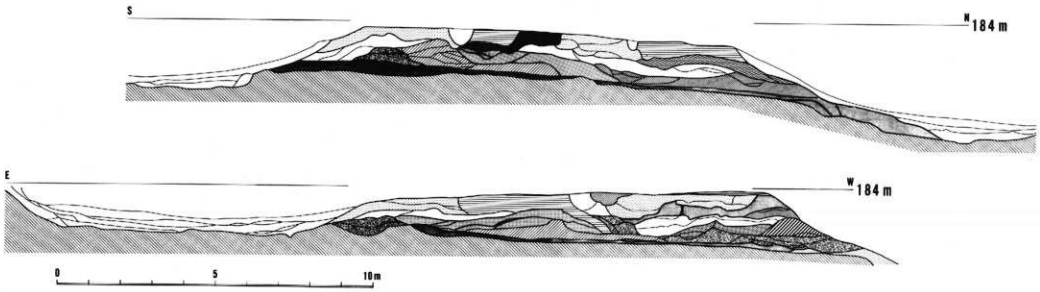


図13. 黒田長野古墳群第4号墳墳丘断面土層図

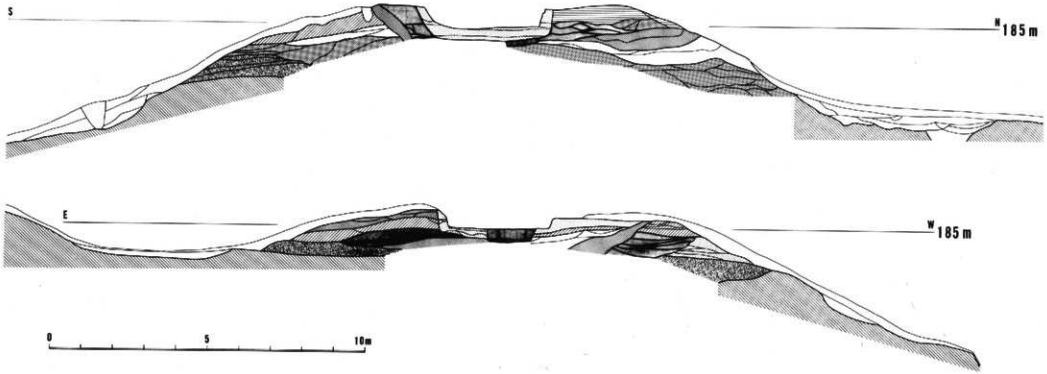


図14. 黒田長野古墳群第5号墳墳丘断面土層図

従って、E－Wトレンチにおける墳丘規模は17.03m、溝を入れて25.73mとなる。

N－Sトレンチ　E－Wトレンチに直交して、墳丘の南北軸線に沿わせて設定したトレンチである。地山整形状況を北側から見ていくと、まず、幅3.8mの溝状の掘り込みが見られる。最深部は、溝の南端から北側へ1.4mの地点にあり、南端から0.5m、北端から0.2mの深さがある。溝より南側は、途中0.7m程の段差を持つが、ほぼ平坦である。平坦部は南端で若干傾斜が急になるが、この部分を含めて、幅19.45mを計る。平坦部に続いて、幅5.5mの溝が掘られている。最深部は北端から0.3mの位置にあり、深さは、北端から0.66m、南端から30.51mである。以上より、墳丘の南北長は、溝の南北外側端部まで28.75m、溝の最深部間は23.85m、溝の内側端での距離は19.45mを計る。

SEトレンチ　幅4.9mの溝を検出した。溝の外側掘り方肩部は、約140度の開きをもって、くの字形にカーブし、内側では276度と急角度に屈折した肩部となっている。溝の最深部は、トレンチ内の東壁面で、溝の外側肩部より0.35m、内側より0.49m、西壁面で、同様に、0.3m及び0.60mを計る。この間の最深部の落差は14.5cmで、西側に傾斜する。

NEトレンチ　ここでもやはり溝状の掘り込みを検出したが、墳丘の北辺に当る部分でさらに一段深く掘り下げた溝が検出された。最深部での落差を数値で示すと、東辺に当る部分で、10.5cm、北辺に当る部分では、さらに、36cmと深くなる。なお、SE・E・NEの3トレンチにおける最深部の落差は、SE・E両トレンチで18cm、E・NE両トレンチで42cmであり、北より程急に傾斜度が大きくなっている。

NWトレンチ　この部分は、崖面に接するため、地山の整形状況は明瞭でなかった。

SWトレンチ　トレンチ西半分は崖面に当り不明であったが、東半分で、やはり溝状の掘り込みがある。幅4.3mで、溝の内外肩部が、外側で151度、内側で208度とほぼ同じ角度で屈折するコーナーを検出した。溝の深さは、内側肩部より4cm、外側より77cmを計る。

SE・S・SW3トレンチにより、墳丘南辺の溝状の掘り込みを確認したが、その最深部の落差を見ると、SE・S両トレンチ間で1.35m、S・SW両トレンチ間0.15mを計る。このことは、、SE・S両トレンチ間で急激に深くなっていることを示す。NE・N両トレンチ間での落差は1.52mであり、墳丘の南北両辺の溝はNEトレンチで見られた様に、東辺より一段深く掘り込まれた様子がうかがえる。なお、E－Wトレンチにおける西端地山面とSWトレンチとの落差は0.86mでSWトレンチ側が低い。E－Wトレンチにおける西半分の地山整形面は非常に落差の小さい傾斜面となっており、従って、自然傾斜の低位側に当る墳丘西辺においても、他辺同様の溝状の掘り込みがなされていた可能性が十分に考えられる。

以上、各トレンチの調査結果を総合すると以下のようになる。

墳形を整えるために、まず、溝状の掘り込みがなされる。溝は内郭線で東側で幅18m、西側遺存部で約22.5mと台形状を呈する。溝の幅は、北辺で3.8m、南辺5.5mで、内・外郭線はほぼ並行するが、東辺はその中央で最大の幅を取って8.7mとなっており、従って、溝の外郭線は五角形となっている。また、溝の深さは、東辺に対し、南・北辺は、1.3mから1.5m程の大きな落差を取って掘り込まれている。これは地形的に左右されており、溝自体の深さは、高所肩部側からで0.4m～0.66mの間に入る。

溝の肩部内外郭線に対し、最深部ラインは各辺とも直線的になる。NE・SE両トレンチで東辺を計測すると約23mという数値が得られ、N－Sトレンチで計測した23.85mに近似した数値となっている。また、南・北両辺とも東辺に対し、ほぼ直交する方向で最深部ラインを結ぶことができ、従って、墳形は、溝の最深部ラインによって確定させている可能性が強い。すなわち、溝の最深部を以って墳丘端部とすることができ、その規模は、

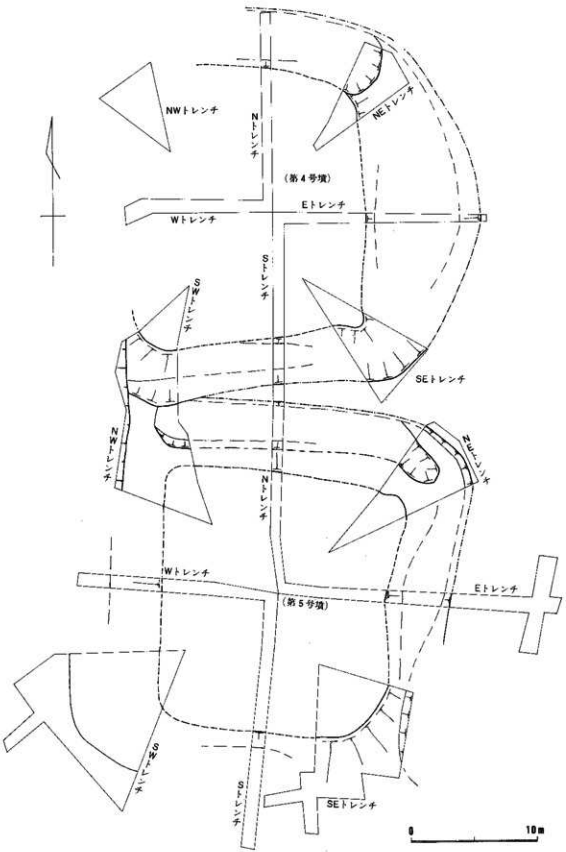


図15. 黒田長野古墳群第4・5号墳トレンチ状況図

N－Sトレンチで計測し得た23.85mを一辺の長さとする方形墳とすることができる。また、最深部ラインは、磁北に対し1度西に振っており（N1度W）、この角度を以って墳丘軸線の方位とし得る。

Ⅲ．墳　丘（図13・図16・図17）

E－Wトレンチ及びN－Sトレンチによる断面土層の観察結果を記述することにする。なお、地山の整形段階については、Ⅱの項で詳述したので、ここでは盛土段階の墳丘築成工程を見ることにする。

E－Wトレンチ　自然傾斜面に対しては直交するトレンチである。ここでは、墳丘の築成に、大別して三段階の過程を経ている。

第一段階は、整形した墳丘を構築すべき自然地山面全体に盛土がなされる段階である。およそ20cm～70cm程の厚さで盛土し、墳丘の基底となるべき部分を整えている。この段階では17層が確認できた。まず、10cm～30cmの厚さの盛土を全面施し、次いで、その上方に、東半分→西半分の順序で盛土されている。東半分では1層を確認できたのにとどまったが、西半分では、さらに3回にわけ、東側の盛土を西側から押えるように順次、盛土されている。この3回の盛土も、各回共通して、西から東へ3層及至6層の盛土がなされている。

第二段階は、墳丘の東側半分を築成する段階である。この段階は、さらに、盛土を西から東へ行なっていく段階と、東から西へ行なわれる段階とに区別できる。前者は下方厚さ約50cm程を盛土する段階で、厚さおよそ20cm前後の盛土が9層にわたって、西から東へ順次なされている。後者は、下方の盛土全体を覆って、4層の盛土が厚さ40cm～60cm程にわたって東から西へ順次なされ、さらに、上層と下層の西側端面に貼り付けるように、幅40cm～90cmの盛土をブロックを積み上げた様な状態で行なっている。

第三段階は、第二段階盛土の西側半分を築成する段階である。この段階では、まず、西端に、幅2.2m、高さ60cm程の盛土を行ない、この高さまで、第二段階盛土までの間を9層にわたって埋める。この9層は、およそ西側から流し込んだ様な土層を形成している。次いで、この上方に、第二段階盛土上端レベルまで盛土され、墳丘が完成されている。

以上が、E－Wトレンチにおける断面土層観察から得た墳丘築成過程の概略である。主体部墓壙は、これら盛土後に掘穿されたものと考えられる。

N－Sトレンチ　E－Wトレンチで設定できた墳丘築成の三段階に対応させて記述する。

第一段階では、整形地山面に10cm～45cm程の盛土が全面になされるが、この上方の盛土は下層の全面に及ばず、墳丘の南側半分で終っており、E－Wトレンチと異る。また、南側3分の2程は、一段高く、厚さ90cm程、12層にわたる細かい盛土層が認められる。

第二段階に対応する土層は、まず第一段階盛土の高さまで、北側墳丘端部までほぼ均一の厚さで盛土される。これは、E－Wトレンチでの第二段階下方盛土に対応する。およそ、大別して3回の過程があり、1回目は南半分、2回目は北半分、3回目は1回目と2回目の盛土の上方ほぼ全体に盛土されている。各回は、1回目と2回目が北から南へ順次盛土される傾向にあり、3回目は、その逆に南から順次盛土されている。E－Wトレンチ第二段階上層に対する盛土についても、下層全面を覆って、およそ大別して4回にわたり、北側から南へ順次盛土されている。各回で2～5層の土層が確認できた。

第三段階は、このN－Sトレンチでは対応する土層を認め難く、第二段階で墳丘の築成は完了している。

以上がE－W・N－S両トレンチにおける断面土層及び両トレンチの関連である。これを各段階及び各段階での小段階（各段階での上下層）を一本の等高線で示し、これを図示すると以下のようになる(図15)。

すなわち、①墳丘基底部を整地する、②墳丘基底部を再度整地する一方、北側を一段盛り上げる、③②での盛

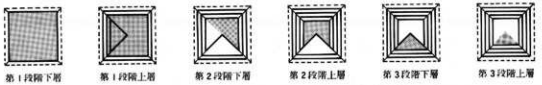


図16. 黒田長野古墳部第4号墳墳丘築成工程模式図（左が北）

土を東及び南側へ広げる、④北東西の三方に盛土して墳丘を完成する。⑤残った南側部を埋め、全体の墳丘を完成する、といった墳丘築成過程を考えることができよう。

また、削平されている墳丘西側を除いて、盛土は、地山整形段階における墳丘四周に穿たれた溝状の掘り込みの上方には及ばず、内側肩部までで終っている。

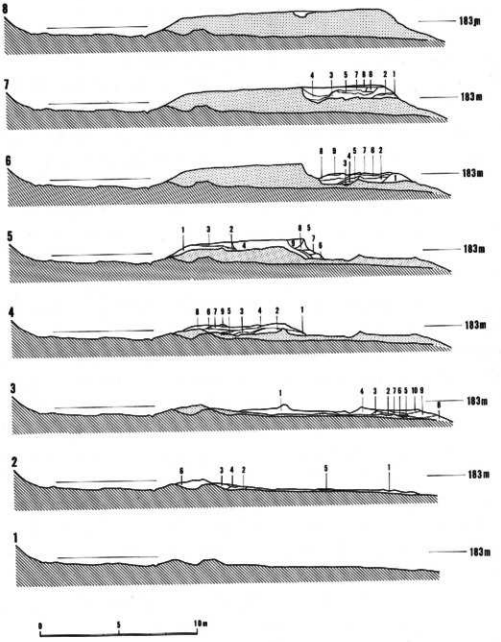


図17. 黒田長野古墳群第4号墳墳丘築成工程図（数字は盛土順位）

Ⅳ．主体部（図18・図19）

墳頂部は大きく削平されていて、明確な埋葬主体は確認できなかった。ただ、墳丘中央部に、幅1.7m、長さ1.6m以上（ただし、2.6m以内）、深さ13cm程の土壙が認められた（図17）。ほぼ垂直に掘り込まれ、コーナーは丸い。壙内は淡黄灰褐色の粘質土で埋まり、その中央で、幅0.84m、長さ1.1mの長方形状に暗灰褐色の粘質土の見られる部分があった。暗灰褐色粘質土は深さ13cm程あり、土壙の壙底面でとまる。遺物は皆無であった。

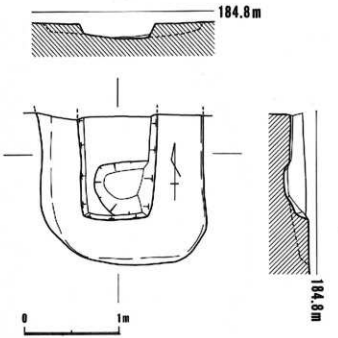


図18．黒田長野古墳群第4号墳主体部？実測図

この土壙について、淡黄灰褐色粘質土の埋る部分が墓壙で、その中央の暗灰褐色粘質土の部分が木棺の痕跡であるとすることも可能である。しかし、土壙の北側を幅1mのEトレンチで掘削してしまったが、トレンチ北側で同様の痕跡が認められず、従って、土壙の最大長は、トレンチ幅を加えた2.6m以上を出ず、非常に短かい。また、土壙内埋土は墳丘の盛土に近似したものではない。これらの点から、この土壙を埋葬主体とするにはやや疑問が残る。ただ、土壙の南側1m附近から、次に記述する土師器壺が出土し、また、第5号墳からの第4号墳の墳丘の復原高からの土壙の深度等、土壙の垂直及び水平位置に関しては、本来、埋葬主体のあるべき位置とすることには無理はない。

次に、上記土壙の南側1m程の位置で、大型の土師器壺が埋置されていた（図18）。壺は、口頸部が欠失していたが、体部はほぼ完存している。出土した時点では、体部の上半分が、下半分内に落ち込んだ状態であったが、頸部接合部を斜上方に向けており、本来正位置で埋納されたものと思われる。これを埋置すべき土壙については、明確にし得なかった。

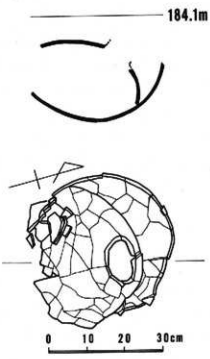


図19．黒田長野古墳群第4号墳棺壺棺？出土状態実測図

Ⅴ．遺　物（図20）

第4号墳からの出土遺物は、墳頂部から出土した土師器壺1点のみである。口頸部は欠失していて、全体の形状は不明である。体部外面に朱を塗布しているようである。頸部と体部との接合部に高さ0.7cm程の断面方形の突帯がめぐらされている。外底部は平底となる。体部外面は全面に細かくヘラ磨きが施され、内面は、頸部附近に指による押え痕が残り、また、底部附近はナデ上げて仕上げているようである。この間は細かいハケ調整で、上部は左下方向から横方向、中程は横方向、下部は左下方向と三段に分けて調整している。

体部のみの器高は38.7cm、頸部径9.3cm、胴部最大径35.7cm、底部

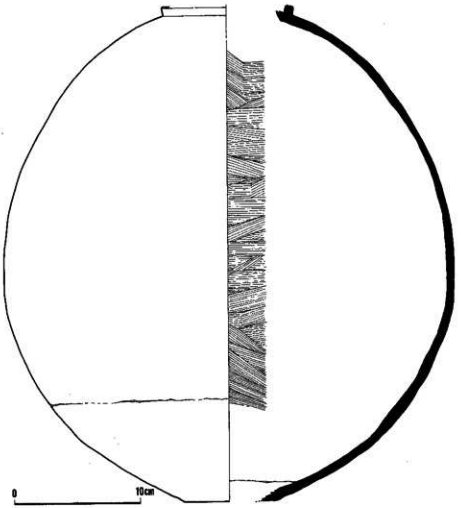


図20. 黒田長野古墳群第４号墳出土土師器壺実測図

径７㎝を計る。体部は、頸部よりややナデ肩となり、胴部最大径が中程よりやや下方にくるため、全体として卵形を呈している。底部との境界は明瞭な稜を取らない。底部穿孔については、大半が欠失していて不明である。

内外面とも黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。器壁の厚さは0.5㎝前後と均一で、焼成も硬質で良好である。又、外面に朱の痕跡が認められる。

口径部が遺存していないので比較検討に困難を極めるが、頸部径が胴部に対して非常に小さいところから、頸部は「く」の字形に屈曲するものと思われる。体部は球体に近く、平底であるが全体として平底を感じさせない。およそ５世紀代のものと思われるが、頸部に凸帯をめぐらせ、体部外面を磨き上げる等古式の様相を残しており、５世紀の前半代におけよう。

ホ). 第５号墳

１．調査前の状況（図12）

第４号墳にほぼ接して南側にある。標高およそ184ｍ附近にあり、第４号墳よりやや高位にある。第５号墳も一見して方墳とわかる状況で遺存しており、各辺の方向は、第４号墳と近似していた。規模もほぼ同規模のものであった。ただ、墳丘の高さが、山側から計測して1.7ｍで、第４号墳より75㎝程高く、墳頂平坦面についても、一辺の長さが３分の２程と狭く、第５号墳については、墳頂部はほぼ完存しているものと思われた。

第５号墳は、長野古墳群の位置する丘陵の南西端に位置し、西側は後世の急峻な崖面に接し、南側も自然渓谷の急斜面に接している。両斜面側での墳丘盛土の岩干の流出は考えられたが、墳丘の遺存程度も非常に良好であることが予想された。

調査は、第４号墳同様、墳頂部での埋葬主体部の追求と、トレンチ調査による墳丘築成法の追求、及び、墳丘各コーナー部分のトレンチ調査による墳形の確定である。なお、主体部追求については困難を極め、最初、墳頂平坦面で、並列する２棺を納めた墓壙かと思われるものを検出したが、これは、墳丘盛土の色調変化による誤解であって、結果的に、墳丘の南北軸線に沿って設定したトレンチの掘穿中に埋葬主体を確認した。

Ⅱ．墳丘規模・形状（図14・図15）

墳丘に設置したトレンチは、墳丘主軸に沿って設定したもの（Ｅ－Ｗトレンチ、Ｎ－Ｓトレンチ）の他に、墳丘の４コーナーに設定した４トレンチ（ＮＥ・ＮＷ・ＳＷ・ＳＥトレンチ）である。Ｅ－Ｗ及びＮ－Ｓ両トレンチは、主に墳丘の盛土の層位を観察するとともに、墳丘規模を追求するものであり、その他は墳形及び地山整形状況を見るためのものであった。以下に、各トレンチでの状況を記述し、墳形、墳丘規模、墳丘四周における地山整形状況を見ることにする。

Ｅ－Ｗトレンチ　自然地山面の傾斜面に直交し、墳丘の東西主軸に沿って設定したトレンチである。従って、トレンチ東側は山側、西は谷側となる。このトレンチでは、墳丘の東西とその東の山側との間の凹所部分で、幅5.15ｍ、最深部の深さが山側肩部から0.58ｍ、西側肩部から0.33ｍの溝状の掘り込みが見られ、黒褐色土の堆積があった。最深部の位置は、西側肩部から東へ1.4ｍの位置にある。この掘り込みより西側では、およそ15ｍ程の間が、ほぼ平坦で、約0.95ｍ程の落差で傾斜している。ここから、自然地山面は一度0.4ｍ程隆起し、再び、墳丘傾斜面に沿った角度で傾斜している。この傾斜は、隆起部最高所より、約2.2ｍの落差を以って、約4.55ｍ程続き、以西は幅２ｍ程の水平面を残して、崖に入る。

以上より、墳丘東側は溝状の掘り込み、西側は自然地山が水平面に変換する部分を以って、墳丘端部とすることができる。従って、墳丘の東西長は、西の水平面への移行点から東側の溝状掘り込みの谷側肩部までの長さ21.65ｍ、溝の最深部までの23.05ｍ、溝の山側肩部までの26.80ｍのいずれかに確当し得る。

なお、東側の溝の最深部と西側水平面との比高差は2.4ｍ、溝の西側肩部とでは2.75ｍの差がある。

Ｎ－Ｓトレンチ　自然傾斜面に並行し、墳丘の南北主軸に沿って設定したトレンチである。ここでは、トレンチの北側、墳丘の北辺の北側で、幅6.4ｍ、最深部の深さが南肩部より1.13ｍ、北側より0.35ｍの溝状の掘り込みを確認した。最深部は南肩部より北へ2.3ｍの位置にある。Ｅ－Ｗトレンチの溝最深部に対し、約２ｍの落差がある。溝より南側はほぼ水平で19.35ｍ程のびる。水平面より南側では特に溝状の掘り込みはないが、幅0.65ｍ程短かく緩傾斜面に移行させた後、急角度で、幅1.7ｍ程の間を掘り込んだ部分がある。以南では再びゆるやかな傾斜面を形成しているが、この部分の幅2.8ｍを含んで幅4.5ｍ程の間には暗褐色土の堆積が認められた。従って、墳丘南辺端部は、自然地山面が急角度で掘り込まれた部分から自然の傾斜面に変化する地点に求めることができよう。

以上の地山面の整形状況から、墳丘の南北長は、南側の急角度傾斜面の下端から、北側の溝状掘り込みの南側肩部までの19.9ｍ、最深部までの24.0ｍ、溝の北側肩部までの26.3ｍのいずれかに確当し得よう。

なお、南側急角度傾斜面下端と溝最深部とのレベルは0.2ｍの差を見るにすぎない。

ＮＥトレンチ　墳丘の北東コーナーに設けたトレンチである。ここでは、山側を1.37ｍ～0.79ｍの深さに及ぶ掘り込み事業が見られた。この掘り込みは墳丘側で除々に浅くなる。すなわち、幅5.8ｍ程の溝状の掘り込

みとなる。墳丘側からは深さ50～57cmで、最深部は溝のほぼ中央にくる。この溝は、山側の掘り込みが直角に近い状態になっている。この溝とE－Wトレンチにおける溝状掘り込みとの比高は、最深部で0.84mとNEトレンチが低い。

この最深部で、墳丘コーナーより西側に幅0.22m、深さ19cm程の新たな溝が検出された。東端から除々に深くなっており、N－Sトレンチで認められた溝状の掘り込みと接続するものと考えられた。N－Sトレンチの溝状部との比高は、最深部で0.92mで、E－Wトレンチ、NEトレンチ、N－Sトレンチと溝状部最深所のレベルは平均的な傾斜面となっている。

NWトレンチ　ここでは、東へのびる墳丘北辺からの掘り込み事業が見られた。この掘り込みは40cm程の落差を持ち、北側へ10cm程の傾斜を取って下る。北辺は第4号墳の南側溝状部によって削平され不明である。西側は、崖へ移行するためやはり不明であるが、掘り込みそのものは、遺存部で約25cm程傾斜する。N－Sトレンチとの最深部の比高は17cmで、N－SとNW間の溝状部は水平に近くなる。

SWトレンチ　ここでは特に溝のような掘り込み事業は認められなかったが、地山面の傾斜の変換する部分があった。すなわち、墳丘側での急傾斜面がほぼ水平に近い平坦面に移行していたのであり、その移行部は大きくカーブしてコーナーをつくり、東及び西方へ直線的にのびていた。同様の傾向はE－Wトレンチでも認められたところである。両トレンチの移行部の比高はほとんど差がなく、これを以って墳丘の南西コーナーとすることが可能である。また、N－Sトレンチにおける墳丘南端との比高もほとんどない。

SEトレンチ　ここではV字状の掘り込みがみられた。山側は垂直近く立ち上り、最深部は南北に直線的にのびる。その北と南とでは、トレンチ内だけで1.87mの差を以って南へ傾斜する。墳丘側肩部からは、その掘り込みの傾斜は、東側へは最深部へ向かうが、南側へは開放されている。N－Sトレンチ、SWトレンチで見られた様な傾斜面の角度の相違する部分は認められない。

以上の各トレンチにおける調査結果を総合すると次のようになる。

まず、SE・E－W・NE3トレンチにおける最深部を結ぶとほぼ直線的に結ぶことができる。次に、N－Sトレンチ南側における掘り込みの屈曲部を通って、SWトレンチにおける傾斜面変換点ラインのコーナーとを結ぶ直線は、ほぼ、上述の南北のラインに直交する。さらに、SWトレンチのコーナーとE－Wトレンチ西側の同様の変換点とを結ぶ直線も南側ラインに直交する。北辺では、NE・N－S両トレンチの最深部を結ぶ直線は東辺ラインに直交し、NWトレンチにおける掘り込みの上端ラインにほぼ一致する。このように、各トレンチにおける溝状部の最深所を結ぶライン及び水平面との移行点を結ぶラインがほぼ方形となるのに対し、特に、溝状部の内外両上端は直角にコーナーを取ることなく、鈍角に開く。また、SEトレンチでは溝は南方で開放された状況にある。これらの点により、墳形及び墳丘規模は、溝状部の最深所及び水平面への移行点を以って決定されたと考えることができる。従って、第4号墳は、東・西両辺長24.0m、南・北両辺長23.5mの平面規模を持ったほぼ方形の墳丘を持つとすることができる。

なお、溝状部は、東辺から北辺にかけてL字状に掘穿され、北辺では北西コーナー附近で解放される。また、東辺では南コーナーで解放される。しかし、溝状部の内側肩部は、N－Sトレンチ南側及びE－Wトレンチ西側において、墳丘端を形成すべき隆起の頂部及び掘り込み事業の上端が残っており、四周に残されていることがわかる。すなわち、溝状部の掘穿は一応墳丘四周に及ぶが、南・西両辺及び北辺の北西コーナー附近では、溝状部の外側端は肩部をつくらず、水平面を形成し、自然地山面に移行させていることが知れる。NEトレンチにおける溝状部内の新たに掘り込んだ溝状部は墳丘北辺を確定すべく新たに掘り込まれたものであろう。

Ⅲ．墳　　丘（図14・図21・図22）

E－Wトレンチ　　墳丘の盛土の基底となるべき自然地山面は、東端は溝状の掘り込みの西端より西側0.85m程から始り、東端は、自然地山面が隆起する部分の頂点までの間となっている。従って、盛土後に、東端には溝状の掘り込みと墳丘との間に0.85mの平坦部が出来、西端では、幅約3.5m程の間が盛土でなく、自然地山面が墳丘の一部（西側墳丘裾部）を形成していることになる。

墳丘築成過程については、その盛土部分に関して、大きく4段階を数えることができる。

第一段階は、墳丘基底となる自然地山面が、西端で隆起するその高さまでの盛土である。この盛土は、地山基底面の東端まで及んでいるようである。厚さは、東側で0.4m、西側で0.7m以上ある。

第二段階は、墳丘の西端のみの部分的な築成で、幅約4.6m（基底面の幅）、高さ1.1mまで横断面三角形状に盛上げ、部分的に墳丘を完成させている。この段階では、さらに3回にわたる盛土過程が考えられる。すなわち、墳丘の西端面を形成する盛土を三角形状に築成し、次いで、同じ高さまで、東側からこの土層を押えるように盛土する。最後に、墳頂と西側墳丘面を構築すべく、下方二層の盛土上面に盛土されている。各回では、版築状に4層～6層の盛土が認められる。

第三段階は、第二段階の盛土の東側を完成させる段階である。この段階にも、2回にわたる盛土工程が組まれているようである。1回目は、第二段階の盛土全体の東側及び第1段階盛土の一部をカットするように、上端幅0.15m、下端幅0.9m程の盛土がなされる。第2回目は、墳丘の東西を完成させる過程である。この過程では、1回目盛土の東面部にかかる土層とそうでない部分とがある。いずれも東側に傾斜した状態で帯状に盛られる。大きく四度の盛土を数えるが、いずれも、下方盛土に積み重ねるように築成される。この過程では、墳丘の東面と墳頂部の一部が形成されることになる。

第四段階は、第一・第二段階と第三段階盛土によって空所となった墳丘中央部分の築成段階である。この段階の盛土は、まず、第三階階の2回目の盛土の西端をほぼ垂直に0.6～0.9mの深さでカットされる。このカット面と西側の第三段階2回目盛土の最下層上面で形成された空所に盛土が充填され、墳頂中央部分が埋って墳丘を完成させている。埋葬主体の墓壙は、若干深くなるが、この段階の盛土内で掘穿されている。

N－Sトレンチ　　E－Wトレンチの各段階に対応させて見ていくと、

第1段階に対応する部分として、南側で厚さ0.8m、北側で1.2m以上の盛土がある。最高面はほぼ同一レベルで、E－Wトレンチにおける第1段階盛土レベルに近い。各々の南側面及び北側面は墳丘裾部における南面及び北面を形成している。

第2段階は、墳丘南側斜面を形成する盛土がある。厚さ0.25～0.6m程の盛土が、大別して3層まで認められる。各々3～6層の盛土で帯状に、下方盛土に積み上げるようにして堆積し、墳丘南側斜面を、墳頂レベルで築成している。

第三段階に対応すべき部分においては、やはり2回にわたる工程が考えられる。すなわち、第二段階盛土の北側をカットし、そのカット面を北側から押えるように盛土された厚さ0.4m程の土層が認められるが、これがE－Wトレンチにおける第三段階1回目に対応しよう。2回目もE－Wトレンチ同様、墳丘の北側を形成すべく盛土されるが、N－Sトレンチの場合、墳頂部まで及ばず、北側斜面で、さらに0.8m程を残して盛土が終っている。すなわち、1回目の盛土部より北側がすべて残り、第四段階の盛土を待つことになる。

従って、第四段階では、E－Wトレンチで見られた墳丘盛土のカットはなく、墳丘北側斜面まで、ほぼ同じ厚さで盛土されている。埋葬主体を構築すべき墓壙は、やはり、第四段階盛土内で、ほぼ、この段階の下底近くま

で掘穿して形成している。

以上のE－Wトレンチ、N－Sトレンチの所見から墳丘築成工程を模式化すると以下のようになる(図21)

図21．黒田長野古墳群第5号墳墳丘築成工程模式図（左が北）

すなわち、①基底面となる自然地山面全体に盛土される、②墳丘の東面及び南面の形成が先行して実施される、

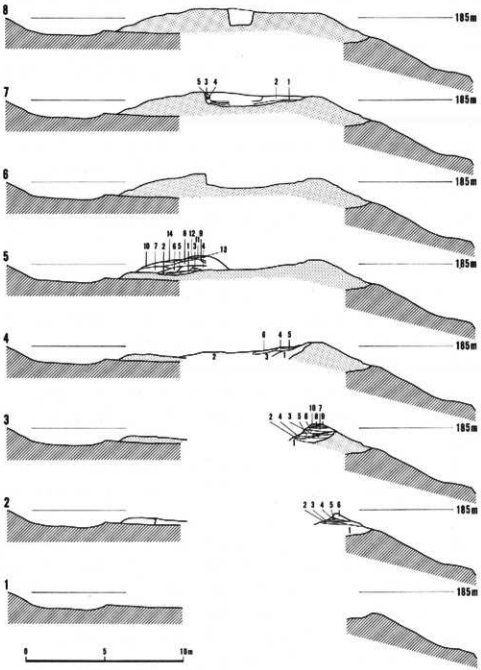


図22．黒田長野古墳群第5号墳墳丘築成工程図

③②の盛土の内側面をカットし、新たに、この面に土砂の貼り付けがなされ墳頂部築成の順備がここでなされる、④墳丘の西側面が次いで完成される、北側面は墳頂まで達せず、最終段階に一部が残される、⑤墳丘の北側面を含めて墳頂部に盛土され、墳丘全体を完成させる、という大別して5工程に集約することができよう。墓壙は、最終段階⑤の盛土内で、その下底とほぼ同一レベルまで掘り下げて形成されている。

Ⅳ．主体部（図23）

埋葬主体は、墳丘頂部のほぼ中央部に設けられている。箱式の木棺を墓壙内に直葬したもので、棺床に粘土を敷いている。墳丘の東・西両辺に並行し、N 4 度Eの方向に軸線を持つ。副葬品は、棺内中央北端附近に鉄剣2

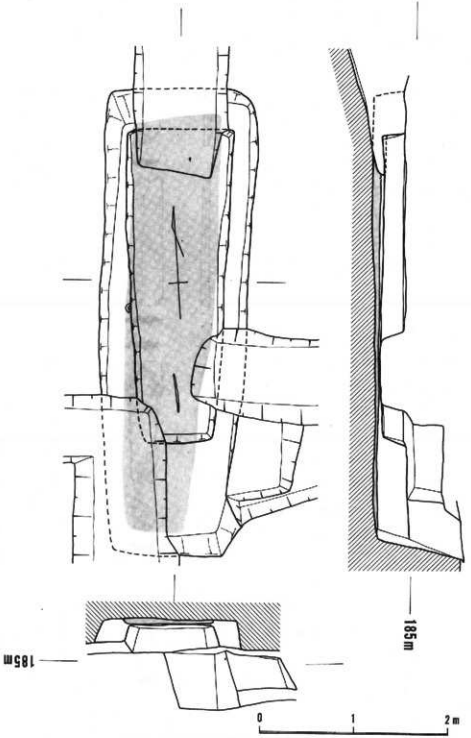


図23．黒田長野古墳群第5号墳主体部実測図

本、棺の東側壁下端で鉄鏃２本を納めている。

墓壙　上端で、南北長4.93ｍ、東西長1.56ｍの長方形を呈す。深さは0.96ｍで、壙底はほぼ水平である。墓壙下端の規模は、南北長4.57ｍ、東西長1.37ｍを計り、壙壁は垂直に近く立ち上っている。墓壙の断面は⌊字形を呈する。

棺床　棺床として、墓壙底に灰褐色の良質でない粘土が敷かれていた。範囲は、壙底全面ではなく、南北長4.45ｍ、東西長は南端で1.0ｍ、北端で0.8ｍで、やや東に寄って敷かれる。また、粘土の範囲は、上部木棺の北半分では棺底から東へずれて敷かれている。粘土の厚味は4cm程と薄い。

木棺　南北長3.3ｍ、東西幅は南端で1.1ｍ、北端で0.8ｍ、深さ0.3ｍを計る箱形のものである。棺の北側に１ｍ近い空所を取っており、従って、棺は墓壙の南側に寄って埋置されている。なお、遺体の頭部は棺幅から南側に位置していたと考えられる。

副葬品　鉄剣２本と鉄鏃２本のみで、貧弱である。一本は、棺内で、木棺の南北中軸線のほぼ直上に、棺の北端より30cm程西側で、柄の部分を北側にして置かれていた。他は、その東側から出土している。鉄鏃は、棺の東側壁下端にあって、棺北端よりおよそ1.4ｍ程南側に、二枚重ねの状態で、刃先を東に向けて出土している。

Ｖ．遺　物（図24）

鉄剣　２は全長38.7cm、刃部長33.6cm、刃部幅は最大で3.4cm、厚味は0.7cmを計る。両関で、茎は幅1.8cm、厚さ0.5cmの横断面長方形を呈す。茎のほぼ中央に目釘が残り、また木痕を残す。これは棺中央より出土している。

１は、全長約35cm、刃部長23.8cm、刃部幅3.1cm、厚さ0.6cmを計る。茎は11.2cmと長く、幅は基部で2.2cm、端部で1.7cm、厚さは0.5cm、横断面長方形を呈す。両関で、刃部基部に、高さ2.7cmで三角形状の木痕が両面に残っている。

鉄鏃　２本とも同じタイプである。やや大型の１点（３）は、刃幅8.9cm、長さ5.2cm、で中央に長さ2.4cmの茎が付く。茎と刃部の両翼とはほぼ同じ長さとなっている。刃部の厚さは0.4cmを計る。４は、刃幅8.1cm、長さ4.7cmとややや小さい。茎は長さ2.4cmで、刃部両翼よりやや長い。ともに、茎は刃部に0.7cm程をのせて鋳付けられ、また、木痕がこの部

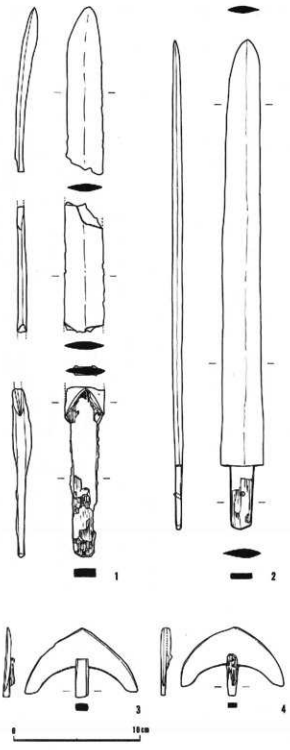


図24．黒田長野古墳群第５号墳出土遺物実測図

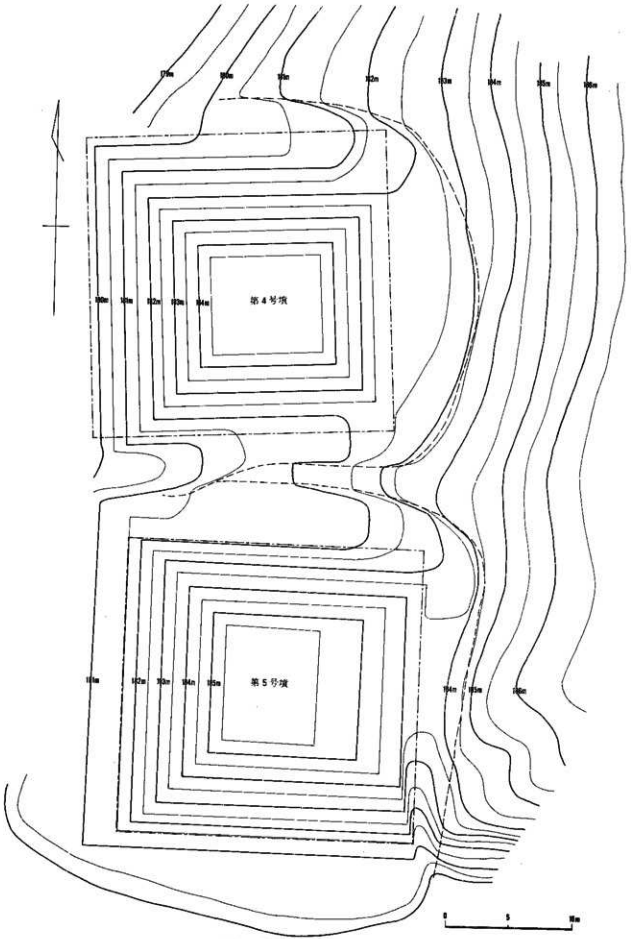


図25. 黒田長野古墳群第4・5号墳墳丘復元図

分にまで残っている。

Ⅵ．まとめ（図25）

ここで、第４号墳と第５号墳とをあわせて、その調査結果を要約しておく。

まず、規模であるが、第４号墳が南北長28.85ｍ、東西長不明、第５号墳が南北長24.0ｍ、東西長23.5ｍと両墳ともほぼ同規模であることがうかがえる。

次に、墳丘築成法についても両墳とも共通点が多い。すなわち、自然地山面の整形については、自然傾斜面の山側をコ字形に掘り込んで溝状の凹所をつくり、次いで、南北両側を掘り込んで墳丘三側面を整えている。谷川については、第５号墳では平坦面をつくっている。盛土の積み上げについても、墳丘の２分の１及至４分の３が先行して築成され、第４号墳では西側、第５号墳では北側の４分の１が最終的に積み上げられて墳丘を完成させている。

内部主体についても、共に木棺の直葬である。

このように、規模、墳丘構造、内部主体に関しては全くの共通項を有している。ただ、墳丘の主軸方向に関して、第４号墳がＮ１度Ｗ、第５号墳がＮ４度Ｅでわずかに相違し、また、第４号墳に土師器の壺の埋置が見られた点に若干の差異を見るにすぎない。

両墳の築造年代についてであるが、第４号墳の南側溝状の掘り込みが、第５号墳の北側の整形部分を、一部切っており、第４号墳が第５号墳に先行して築成されていることは明らかである。第４号墳の年代は出土した壺が、およそ５世紀前半代のものであり、古墳の築造もこの頃に当てることができる。従って、第５号墳の下限が決定できるわけだが、上記したように、規模、墳丘構造等で酷似した点が認められ、第５号墳もさほど第４号墳より古くならないものと考えられる。およそ、一世代程の差ではないかと考える。

３．考　　察

以上の調査結果から、黒田長野古墳群として一括して扱った諸古墳であるが、第１号墓が平安時代前期、第２号墳が古墳時代後期、第４・５号墳が古墳時代中期と各々年代や墳墓の性格が異るのであり、従って、古墳群も３種類に区別して扱うべきであろう。ここでは、第２号墳、第４・５号墳の各々について、問題点と若干の考察を試みておくことにする。

イ）．湖北地方の横穴式石室（図26・表２）

湖北地方において、この数年の間に多くの古墳の発掘調査が実施されたが、その大半は横穴式石室を持ったものであった。かって、この最近の調査例をもとに、湖北地方の後期古墳の編年を試みたことがある[9]。すなわち、最古の横穴式石室を持つ湖北町四郎崎古墳と終末期の様相を呈する長浜市諸頭山３号墳との間を６期に区分し得たのである。この段階では、主に出土須恵器の編年に主きを置いたのであって、横穴式石室の規模、形状、構造等については、第三期に比定した長浜市中山古墳が全壊に近い状態であって、石室の構造等を明らかにし得なかったのである。このたび、長野第２号墳の発掘調査によって、中山古墳と同時期の石室構造が明らかになった。従って、湖北地方の横穴式石室の構造の流れが見通せることとなり、ここで改めて湖北地方における横穴式石室、特に構造面についてながめてみたい。

かって試みた編年は以下の通りであった。

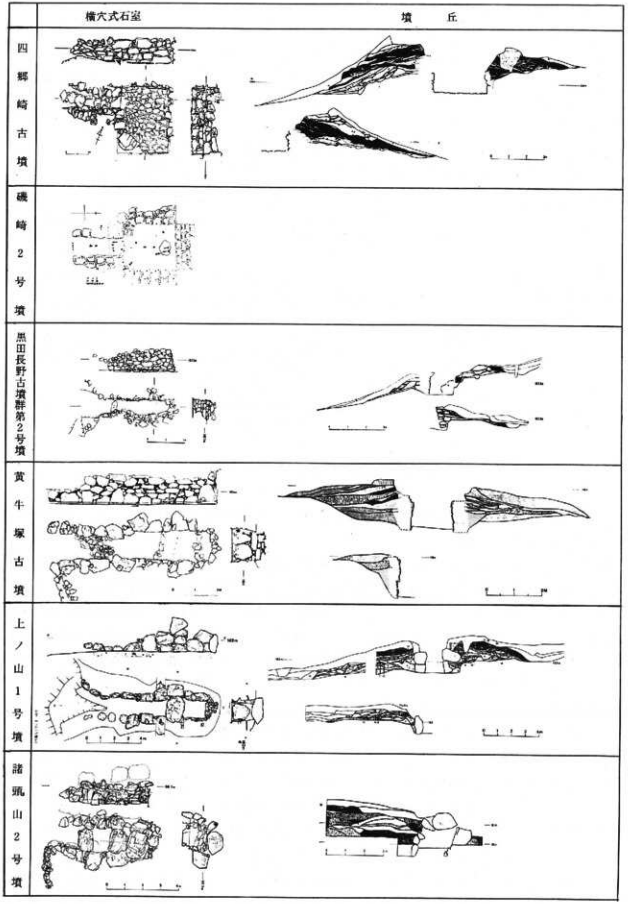


図26. 湖北地方横穴式石室変遷図

	古墳名	玄室(m)		羨道(m)		玄室幅指数		羨道幅指数		使用石材			石室壁面の構成	その他
		長さ	幅	長さ	幅	両袖	片袖	両袖	片袖	石材	奥壁	玄門		
I	四郷崎古墳	2.3	3.0	2.7	0.5	130		16		やや小型の割石と小型の塊石			下方はほぼ垂直、コーナーに石材をせり出して置き、天井部をドーム状にしている。	玄室床面に敷石。開仕切り石があり、羨道が一段高い。排水溝を持つ。
II	磯崎2号墳	3.51	3.12	3.6	1.21	88.9		38.8		やや小型の石材		袖部分に大型扁平石一枚を縦位置に置く。	下方はほぼ垂直、コーナーに石材をせり出して置き、天井部をドーム状にしている。	
III	長野第2号墳	2.66	0.94	1.49	0.7		35.3		74.5	小型の板状割石、塊石			わずかに内傾、奥壁コーナーは両壁にわたる石材を置いている。	入口外方に列石。中山古墳も小型の石材を用いている。
IV	黄牛塚古墳	4.21	1.34	3.3	1.15		31.8		85.8	やや大型の割石、塊石	鏡石2枚	両壁とも石材を縦位置に置き玄門としている。	わずかに内傾。	入口外側に列石があり、2～3段に積み上げている。
V	上ノ山1号墳	3.84	1.28	3.84	1.13	33.3		92.2		大型の塊石	鏡石1枚	袖部に縦位置に石材を置く。	わずかに内傾。	入口外側に列石。
VI	諸頭山2号墳	2.8	1.38	2.8	1.14	49.3		82.6		大型の塊石	鏡石1枚	袖部に縦位置に石材を置く。	わずかに内傾。	入口外側に列石。

表2．湖北地方における横穴式石室の平面形及び構造の変遷

湖北町四郷崎古墳①→木原町磯2号墳②→長浜市中山古墳③→近江町黄牛塚古墳④→余呉町上ノ山1号墳⑤→長浜市諸頭山2号墳⑥→同市諸頭山3号墳⑦

現在最古式と考えられる四郷崎古墳は三形式にわたる須恵器類を出土し、最も古いものが6世紀前半頃と考えられたものである。諸頭山3号墳は無遺物の小型の竪穴式石室であって、終末期古墳の様相を呈するものであった。ここでは、横穴式石室のみに限りたいので、これは省略したい。諸頭山2号墳からは7世期初頭の単一形式の須恵器類が出土している。従って、横穴式石室に限っては、湖北地方では6世紀前半から7世紀初頭のほぼ100年間を6期に区分できたのである。6期の各期に該当する古墳の規模、石材、壁面構成等を一覧表（表2）にしてみた。この表から各々の特徴を読みとっていきたい。

石室の平面形について、いわゆる玄室幅指数と羨道幅指数⑧をとった。玄室幅指数は長さに対する幅の占める比率を示すもので、これに関しては、四郷崎・磯崎2号両墳と長野第2号墳とでは極端に数値が異る。四郷崎古墳では130と玄室長が幅より短かく、長方形プランの長辺に羨道が取り付くが、方形プランに近い。これに対し、長野第2号墳以降では30代及び諸頭山2号墳の40代と玄室長が幅の2倍及至3倍と細長い長方形プランを示している。これに対応して、羨道幅指数も磯崎2号墳以前と長野第2号墳以降とで極端な相違を示している。

石室に使用する石材に関しては、四郷崎・磯崎2号両墳で比較的小型の板状の割石を多く用い、長野第2号墳においても小型の割石を多用している。石室石材にやや大型の塊石が多用されるのは黄牛塚古墳以降であって、上ノ山1号墳や諸頭山2号墳では大型の塊石が壁面構成の主流を占めている。長野第2号墳と時期的に併行する中山古墳においても、遺存する石材は小型であり、従って、壁面石材の大型化の傾向は黄牛塚古墳で始り、上ノ山

2号墳以降一般化する傾向にあるといえる。

次に、上記の傾向の中で、奥壁に使用する石材について、奥壁に大型の一枚石を使用するいわゆる鏡石の使用が、やはり、黄牛塚古墳以降に現われている。黄牛塚古墳では2枚の石材を縦位置に置いて鏡とし、上ノ山1号・諸頭山2号両墳では1枚で奥壁を構成している。奥壁に使用する石材と同様、玄室と羨道とを明確に区別するために使用する石材の用い方にも類似した傾向が指摘できる。すなわち、玄室の袖に当る部分に石材を縦位置において、いわゆる玄門を構成させるわけだが、片袖の黄牛塚古墳において、袖の無い側壁面で、袖部に対応する位置にやはり縦位置の石材が認められるのである。同じ片袖の長野第2号墳では認められない点である。袖部に他の側壁面と異った方法で石材を用いる方法は、磯崎2号墳に認められるところであるが、袖の無い部分にまで用い、玄室と羨道とを区別するのは、羨道幅指数が示すように、玄室幅と羨道幅とが近似した数値を取るようになり、その境界が不明確になる傾向にあることと関係するのではないか。

壁面構成に関する特徴は、四郷崎・磯崎2号両墳ともに、下方数段まではほぼ垂直に積み上げ、上方では、各コーナーで、2側面にまたがるよう石材をせり出して積み上げているようであり、従って、天井部はドーム型に構成していると考えられる。長野第2号墳以降では、各壁面とも、全体的にわずかに内傾させ、天井部での幅を狭めて天井石を横架している。ただ、長野第2号墳では、奥壁両コーナーでの石材の積み方が黄牛塚古墳以降と異る特徴を持っている。すなわち、奥壁及び側壁を一段積み上げる毎に、両石材にまたがるよう両壁で形成されるコーナー部分に積み上げているのである。天井部はドーム状にはならないが、その積み方は、四郷崎・磯崎2号墳における壁面上方のコーナーでの積み方に類似しているといえる。

その他の特徴としては、四郷崎古墳に玄室床面に敷石があり、羨道が間切り石で一段高い床面を形成し、排水溝を持っている。また、羨道入口に石材一石を縦位置において、入口を明示している。長野第2号墳以降では、羨道外側で入口を飾るべくハの字形に広がる列石があり、黄牛塚古墳では2～3段に積み上げた状態で遺存している。

以上のことから、磯崎2号墳以前と黄牛塚古墳以降とでは、石室の規模、平面形及び石室構造に明らかな違いがあることがわかる。この中間に位置する長野2号墳は、その平面形に関しては黄牛塚古墳に類するが、使用する石材や奥壁、玄門を構成する石材の用い方では磯崎古墳に近く、両者の過渡的な様相を呈しているといえる。奥壁コーナーに見られる石材の積み方等も石室構築上の過渡的様相としてとらえることが可能である。こうした石室構造上の変化傾向は、横穴式石室を主体とする後期群集墳の動向と対応するものと考えられる。かって、湖北地方における後期群集墳の群形成に関して、①群形成が6世紀初頭までさかのぼり、その初期段階で単次葬の形態を取り、おそくとも6世紀後葉に至って横穴式石室を採用して複次葬を可能にしたもの（上ノ山古墳群）、②6世紀前葉に早くも横穴式石室を採用するが、単独で群を形成しないもの（①四郷崎古墳）、③横穴式石室の採用が比較的早く、以降、継続して横穴式石室を築造していくもの（磯崎古墳群）、④群の形成が6世紀後半代まで下るもの（諸頭山古墳群）、の四つのタイプに分類し、①において、単次葬から複次葬への変化が見られ、複次葬の段階だけでは④と同じタイプになること、②において、追葬が④のタイプの群集墳が出現するころに終えていること、④のタイプが一般的であること等から、6世紀中頃に、横穴式石室の一般化というより、横穴式石室を必要とする何等かの社会的変化が生じたのではないかと考えた。すなわち、長野第2号墳の過渡的様相をもつものをも含めた石室の定形化ともいうべき傾向においても、以前の単次葬の存在、横穴式石室の単独築造の存在という事実に充分対置できる現象といえる。6世紀中頃を境にしておこるこのような変化は、一応近畿一円に見られるところであるが、湖北地方における石室構造上の変化には極端な一面がある。四郷崎古墳及び磯崎2号

墳に見られるような方形に近い平面とドーム型の天井部を持つ横穴式石室の祖形は中国の塼室墓に求められ、我国に編貫された渡来系氏族の墳墓とされている。[8] 四郷崎・磯崎2号両墳からは、ミニチュア炊飯具等、そのことを示す顕著な遺物は出土していないが、ともかく、横穴式石室の受容段階と定形化傾向を示す段階とは一線を画すべき状況である。

横穴式石室の受容及び終えん、しいては後期群集墳の展開過程については、少なくとも四タイプの群構成が指摘できる等多様な展開を示しており、現段階では論をつくせないが、少くとも石室の構造上大きな変化が見られるのである。この変化過程が、湖北地方に限らず、近畿一円における群集墳の展開過程と一致するところであるが、今後、つくり付けカマドの発生等住居構造、生活様式の変化等を含めた集落構成の変化等とも十分に対応させた上で後期群集墳の展開を見つめていく必要があろう。

ロ). 方墳の問題点（図27・表3）

古墳の墳形には、前方後円墳等いくつかの形が見られるが、その中で、方墳と呼ばれる方形墳の数は極めて少ない。方墳は古墳時代一般的に採用されているが、その数は、畿内に限っても111基といわれ、畿外で最も分布数の多い出雲で35基、吉備の22基で、その僅少性を押し計ることができる。[9] 比較的詳細に方墳の分布調査が実施されている丹後、丹波両地方で、古墳数約2700基中、方墳は約30基とされている。[10] このような僅少性は近江国においても同様で、発掘調査の結果確実に方墳とし得るものは、今回の黒田長野古墳群中の2基、余呉町黒田長山古墳群中の1基（中期）[11]、安土町竜石山古墳群中の1基（後期）[12]の計4基である。その他、外形から判断し得るものを含めても10数基を数えるにすぎない。このような数量の僅少性とともに、その分布状況においても、非常に限定された地域に、集中的に分布するという特性をも併せ持っている。このように、方墳は、極めて限定された性格を有する墳形であるとすることができそうであるが、以下において、黒田長野古墳群第4・5号墳の内容、周辺の歴史的環境等を踏まえて、方墳の問題点に若干触れてみたいと思う。

Ⅰ．黒田長野古墳群第4・5号墳について、

これまでの報文と若干重複するが、以下で比較検討するため、第4・5号墳の内容、歴史的環境等をここで再度記述しておきたい。

第4・5号墳は、第5号墳が第4号墳に先行するが、およそ、両墳とも5世紀前半代頃のものと考えられる。一辺23.5m前後の同規模で、5度程の軸線の差を以って、ほぼ接して築造されている。副葬品は、第5号墳の主体部から鉄剣2本、鉄鏃2本が出土したのみで、玉類等の出土はない。立地は丘陵にあり、古墳からは、南方の湖北平野を見渡すことができ、北方は、柳ヶ瀬の断層谷を見通すことができる。眼下には、越前武生に通ずる古来よりの幹道と考えられる北国街道（現国道365号線）が走り、古墳の位置は、その門戸に当る部分の東側丘陵腹部に当る。

黒田長野古墳群附近には、北隣する丘陵尾根上に15基の円墳と1基の方墳から構成される黒田長山古墳群がある。およそ5C末頃の小円墳・方墳群である。群の盟主的な位置にある4号墳から短甲、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉾、鉄斧等武器、武具が豊富に出土したが、他からは、鉄刀あるいは鉄鏃等が出土したのにとどまる。ただ、貧弱な副葬品であるが、武器、武具のみを副葬している点に特徴がある。後期にも、西山・上ノ山・大門・日槍塚等、北国街道に沿って古墳群が点在し、生産基盤の少ない渓谷において、越前武生に通ずる街道の重要性を良く物語っている。

北国街道を利用して越前へ抜けるためには、一つに、湖上交通を利用して湖北町尾上で上陸し、余呉川沿いを

北上するルートと、現在の365号線（北国脇往還道）を利用して、関ヶ原方面から北上するルートとがある。前者のルートに沿っては、余呉川に沿って、前期の若宮山古墳、中期の古保利古墳群、中期から後期の通出山古墳群、物部古墳群等、前方後円墳を中心とする首長系列の古墳及び群が存在する。後者のルートに沿っては、丁野岡山古墳群や甕篠塚古墳等やはり首長系列の古墳が存在する。こうした首長系列の墳墓が湖北平野内の小丘あるいは平地に立地するのに対し、黒田長野古墳群第４・５号墳が、平野部と渓谷部とを界する地点、すなわち、両ルートが接合する地点に立地することは、両墳の性格の一端を暗示しているものと思われる。

Ⅱ．分布の状況Ⅰ（丹後・丹波両丹地方を例に）[2]

昭和53年に、京都府丹後郷土資料館で常設展資料として『両丹地方の方墳』が出版された。両丹とは、丹後・丹波両地方を指す。この資料の中で、方墳の性格を考える上で興味ある点が少なからず見られたので、まず、両丹地方の方墳の有り方から見て見ることにする。

両丹地方で、現在知られる方墳は36基である。その分布は、丹波地方の南端の亀岡盆地と北端の福知山盆地とに集中して存在する。丹後地方には５基が知られるのみである。

亀岡盆地の方墳は10基が知られるが、そのうち３基は穴太古墳群（16基）中に含まれるもので、第16号墳の円墳から鏡、剣、玉類等の他に須恵器類が出土しており、後期の方墳と考えられる。北ノ庄古墳は一辺14ｍの小方墳であるが内容は不明である。他の６基は典型的な中期方墳で、２基づつが近接して分布する。すなわち、桝塚及び滝ノ花塚古墳がおよそ170ｍの間を置いて南北に分布する。岡古墳は、山城から老ノ坂峠を越えて亀岡盆地に入ったあたりに位置し、北側の滝ノ花塚古墳の西方80ｍ程のところには、剣と甲冑を出土したと伝える前方後円墳である野条古墳（後円部径27ｍ、前方部不明）がある。

天神塚古墳、坊主塚古墳は盆地のやや北部にあって、およそ100ｍの間隔で東西に並ぶ。附近には後期古墳群が多数分布するが、東側の坊主塚古墳より南西約1.6㎞附近には、全長80ｍの前方後円墳である千歳車塚古墳がある。周濠を持ち、段築及び造出しのある墳丘である。ハニワが出土しており、中期中頃の古墳であろう。

馬場ヶ崎１号・２号墳は、天神塚・坊主塚両古墳とは盆地の反対、西方丘陵裾に位置する。およそ130ｍ程離れて分布する。後背の丘陵に後期古墳群が発達している点、天神塚・坊主塚両古墳の分布状況に似ているが、附近に前方後円墳を見ない。

以上の亀岡盆地における方墳分布の特徴としては次のような点が指摘できる。すなわち、①後期方墳は群集墳中に含まれ、他の円墳とほぼ同規模である、②中期の方墳は、100ｍ前後の距離を以って、２基づつが並ぶ。この２点のうち、後者は３グループあるわけだが、南端の桝塚・滝ノ花塚両古墳は、前方後円墳である野条古墳と群を形成している。方墳２基は同規模であり、野条古墳も後円部径27ｍと方墳とさほど大差のない規模である。北部の坊主塚・天神塚両古墳は千歳車塚古墳とは1.6㎞の距離がある。車塚古墳は周濠を含めると100ｍ近くなるが、陪塚とはしがたい。両古墳の後背丘陵上に後期群集墳が発達している点については、馬場ヶ崎１・２号両墳の有り方と似ている。

次に福知山盆地であるが、ここでは、現在の綾部市域と福知山市域との２地域に集中する。綾部市域では５基の方墳が知られ、前期から後期にかけてみられる。前期のものは成山３号墳で、ほぼ同規模の円墳２基を加えて群を構成さしている。中期は、堅塚古墳とあやめ塚古墳が約120ｍの間隔をおいて南北に、辺をそろえて分布している。附近には、南方400ｍ程の所に全長40ｍ程の前方後円墳がある。藤ノ木古墳は段築があるが、詳細は不明である。附近に顕著な古墳の発達は認められない。以上をまとめると、①前期の方墳は同一規模の群中の１基を構成する、②中期のものは、120ｍの間隔を置き、附近に前方後円墳の見られるものと、全く単独で存在するもの

とがある。中期のもので、前者では、南側の聖塚古墳が一辺45.5mと大規模であやめ塚古墳の2倍近くある。後者の藤ノ木古墳は一辺25mで、あやめ塚古墳とほぼ同規模である。

福知山市域では10基の方墳が知られている。やはり、前期から後期まで継起的に存在する。前期では宝蔵山4号墳があり、他に3基の円墳を以って群を構成している。方墳が最高所にあり、主墳的位置にある。中期では、前半の八ヶ谷古墳が単独で分布する。後半のものでは中坂古墳群西群が各辺を接して4基見られる。一辺8m～12mと規模は小さい。その他、妙見1号墳が一辺42mと大規模で、周濠とハニワを持ち、同一丘陵上に径5～15mの11基の小円墳群を従えている。高田山1号・2号墳はほぼ同規模で南北に近接して分布している。附近に古墳の発達を見ず、独立している。後期では中坂古墳群東群がある。方墳は一辺13mと小さく、造り出しのある円墳1基と円墳2基とから構成されている。以上から、①前期の方墳は3基の円墳を従えた主墳を形成している。中期では、①単独のもの（ハケ谷古墳）、②2基が並列し、独立するもの（高田山1号・2号）、③小規模で各辺を接して群集するもの（中坂古墳群西群）、④多数の小円墳を従え、一辺42mと大規模なもの（妙見1号墳）と四タイプがある。このうち、①は綾部市域の藤ノ木古墳に類例があり、②は亀岡盆地、綾部市域ともに見られるものである。③については、京北町園山古墳群で一辺10m～20mの方墳かと考えられる5基が密接した位置関係にある。④については、類例がない。

以上の丹波地方に対し、丹後地方では、丹後町の産土山古墳北方800m程の所に桝塚古墳、神明山古墳の500m程南方にすべて方墳かとされる願興寺古墳群がある。ともに中期のものと考えられている。周濠と段築のある墳丘を持つ円山2号墳も中期古墳と考えられるが、径34mの円墳に従う。セイガイ谷1号墳は後期群集墳中の1基である。

以上、両丹地方の方墳の分布状況を概略したが、特に中期の方墳についてその状況は、およそ、次のようにまとめることができる。

①2基が近接して分布するもので、さらに附近に前方後円墳の見られるもの（滝ノ花塚古墳＋桝塚古墳、天神塚古墳＋坊主塚古墳）、と見られないもの（馬場ヶ崎1号墳＋2号墳、高日山1号墳＋2号墳）に分かれる。

②1基単独にあるもので、やはり、附近に前方後円墳及至大円墳のあるもの（桝塚古墳）、とないもの（藤ノ木古墳、八ヶ谷古墳）、とがある。

③一辺20m以下の小方墳が密集して築成されるもの（周山古墳群5基、中坂古墳群西群4基、願興寺古墳群2～5基）

④円墳とともに群をなすもので、方墳が主たる規模のもの（妙見1号墳）と従的な規模のもの（円山2号墳）とがある。

なお、前期のものは、宝蔵山4号墳と成山3号墳の2基であるが、いずれも円墳2～3基とともに群を構成し、規模の上では大差ない。後期のものでは、やはり群集墳中に含まれ、他の円墳群と内容的にも差異は少ないようである。

さて、中期方墳を中心に記述した、上記の特徴から明らかなように、2基の方墳が比較的近距離にあって並列して分布する例が最も多く、亀岡盆地内で3カ所、綾部及び福知山市域の福知山盆地内で2カ所の計5カ所において見られる。次いで、単独で分布するものが亀岡盆地、福知山盆地、丹後半島で各1カ所、小方墳が密集して群をなすものが福知山盆地、丹後半島で各1カ所となっている。

また、附近に大型の前方後円墳あるいは円墳が存在するものは10カ所中5カ所に及ぶ。

概して、中期方墳は、円墳との組み合せを以って群を構成されることが極めて少ないといえよう。この様な分

布状況にある方墳の内容について見ると、まず、副葬品について、亀岡盆地に分布する桝塚・滝ノ花塚・坊主塚古墳で興味ある点が指摘されている。この三古墳は副葬品の内容が比較的良く知られているものであるが、いずれにも玉類の出土を見ておらず、鏡、武具、武器に限られていることである。その他では、中坂2号墳が刀1、刀子1、鉄鏃5、9号墳が刀1で武器のみ出土している。聖塚古墳からは、勾玉、ガラス玉の出土を見ているが、鏡の他、短甲1、鎧1、刀剣、矛1、鉄鏃、冑と武具、武器の副葬が非常に豊富である点注意される。

こうした副葬品に見られる傾向は、中期古墳一般に見られる鉄製品の副葬の量的増加傾向と符合する一面もあるが、特に亀岡盆地において見られる玉類の欠如、武具、武器のみの副葬という点に関しては注意すべきで、方墳の持つ性格を暗示しているといえよう。

規模の上では、聖塚古墳の一辺45.5m、妙見山1号墳の42mが卓越しているが、小方墳の密集しているもの以外では、およそ一辺23m～34mの間に入り、近似した規模となっている。従って、この点に関しては同質のものが多いといえる。ただ、馬場ヶ崎1号墳の16mに対し2号墳の26m、聖塚古墳の45.5mに対しあやめ塚古墳の23mと2基が近隣するものの中で大小の差を生じさせているものがある。

Ⅲ．分布の状況Ⅱ（畿内を中心に）[9]

以上によって、両端地方の方墳の有り方の概略が明らかになった。この中で、附近に前方後円墳や大型円墳の存在する事例が目立つが、いわゆる陪塚としての方墳は、大和、河内、山城の畿内における方墳の有り方として特徴的な点といえる。大和においては、中期前半を中心とした佐紀古墳群で、成務陵に3基（前方後円墳1基）、盤之緩陵に2基（前方後円墳2基、円墳3基）、コナベ古墳に8基（円墳3基）、ウワナベ古墳に1基（円墳4基）と計14基と顕著であり、河内においても、中期前半を中心とする古市誉田古墳群中の允恭陵に1基、仲津緩陵に1基、応神陵に6基、墓山古墳に4基、仲哀陵に2基と計14基が見られる。和泉では仁徳陵とイタスケ古墳に各1基と少ないが、山城に入って、久津川古墳群中の久津川車塚古墳の陪塚として3基の方墳が見られる。このような、いわゆる陪塚的な方墳は、大和で55基中18基、河内で30基中15基、和泉で6基中2基、山城で14基中3基を数え、中期方墳に限定すればさらに高い比率を占めることになる。これら陪塚的な古墳の中で、方墳に限定はされないが、百舌鳥古墳群中の履中陵陪塚七観古墳、応神天皇陵の陪塚の盾塚古墳、ウワナベ古墳の陪塚高塚古墳（ウワナベ6号墳）、応神陵の陪塚であるアリ山古墳等において、人体埋葬を確認できる要素がなく、短甲、刀剣等武具、武器のみを多量に埋納していることが報告されている。

次に、両丹地方では、方墳2基が近隣し、また、単独で分布し、附近に前方後円墳のない独立した方墳が多い。こうした方墳は、まず大和では、大和盆地南端、紀ノ川中流域の五条市域に集中的に分布する。五条市北部にある西山・塚山・猫塚・荒坂青墓等古墳は一辺24.5m～30.5mの間にあるほぼ近似した規模の方墳であり、各々単独で分布する。塚山古墳からは冑、短甲、蕨手刀子、槍身、刀、刀子、工具が出土し、猫塚古墳からも武具、武器、の他に帯金具、鏡、工具が出土したのみで、その副葬品の有り方についても注意されるところである。山城においては、前期末の尼塚古墳、中期の下大谷古墳群、宮ノ平古墳群（久津川古墳群に含まれる）、中期の八坂方墳が知られている。

小型方墳が密集して群をなすものについては、畿内ではほとんど見られず、近畿地方では、両丹地方の特色といえる。

最後の円墳と群をなす事例については、大和の新沢千塚古墳群、近内古墳群において顕著である。特に、近内古墳群は、先述の西山・塚山・猫塚・荒坂青墓古墳の所在する五条市北部にあり、この地域における方墳の集中的分布は注意される。近内古墳群は、円墳と方墳が数10基あったといわれ、調査記録のある5基（第3～7号墳）

国名	点	名称	所在地	立地	一辺長(m)	ハニワ	葺石	段築	内部施設	副葬品
大和	1－1	成務陵陪塚 3基	奈良市佐紀町							
	2	都之塚陵陪塚 2基	〃 〃	丘陵端						
	3	コナベ古墳陪塚8基	〃 法華寺町	丘陵端						
	4	ウワナベ古墳陪塚1基	〃 〃							
		大和5号墳	〃 〃	台地	12.7	○			粘土郭？	添製品, 鉄鉄製品, 鉄鉾, 鉄矛, 双孔円板, 金泊
	2－1	西山古墳	奈良県五条市三在	谷間低地	30					
	2	塚山古墳	〃 〃 出屋敷	〃	24.5	○			組合式石棺	青, 短甲, 鏡手刀子, 鏃, 刀, 刀子, 工具
	3	猫塚古墳	〃 〃 西河内	〃	30.3	○			竪穴式石室	金銅製冑, 桂甲, 肩帯金具, 珠文鏡, 短甲, 鉄鏃, 工具
	4	荒坂寄墓古墳	〃 〃 今井	丘陵上	30.5	○			〃	
	5	近内古墳群 2基	〃 〃 近内							
		近内第6号墳	〃 〃 〃	谷間低地	15.2	○			粘土郭	小鉄片
			〃 〃 〃	〃	8					
	6	ツジノ山古墳	〃 〃 〃	〃	30	○				
河内	3－1	允恭陵陪塚 1基	大阪府南河内郡美陵町	平地						
	2	仲津媛陵陪塚 1基	〃 〃 〃	〃						
	3	古室山古墳陪塚1基	〃 〃 〃	〃						
	4	応神陵陪塚 6基	〃 羽曳野古市出	〃						
		珠金塚古墳	〃 〃 〃	平地	29				粘土郭	環状乳神獣鏡等4面, 玉類, 短甲, 農工具
		アリ山古墳	〃 〃 〃	〃	45					鏡, 刀, 鏡手刀子, 鉄鏃, 鎌, 斧, 鉤状鉄器
	5	仲哀徳陪塚 2基	〃 〃 野々上	〃						
	6	墓山古墳陪塚 4基	〃 南河内郡美陵町	〃						
	7	助太山古墳	〃 〃 〃	〃	49					
	8	中山古墳	〃 〃 〃	〃	48					
	9	八島塚古墳	〃 〃 〃	〃	36					
和泉	4－1	仁徳陵陪塚 1基	〃 堺市大仙町	〃						
	2	イタスケ古墳陪塚1基	〃 〃 百舌鳥本町	〃						
山城	5－1	車塚古墳陪塚 3基	京都府久世郡城陽町	〃						
		青塚古墳	〃 〃 〃	〃	34.6	○		○	粘土郭2	鉄形鏃, 玉類, 短甲, 直刀, 刀子, 鉄鏃, 斧, 鎗
		両塚古墳	〃 〃 〃	〃	32	○		○	竪穴式石室	鏃, 鏡, 鉇, 穂摘具, 刀子, 漆石製鏃
	2	西山古墳群	〃 〃 〃	丘陵上						
		西山2号墳	〃 〃 〃	〃	24				土壙墓1，粘土郭3	三角縁神獣鏡等2面, 石釧, 銅鏃, 剣, 鉄鏃, 工具
	3	芝ヶ原古墳群 1基	〃 〃 〃	〃						
	4	下大谷古墳群 2基	〃 〃 〃	丘陵上					粘土郭, 円筒棺, 木棺直葬	管玉, 斧, 鏃, 鉄鏃, 直刀
	5	尼塚古墳	〃 〃 〃	丘陵端	25				粘土郭	銅鏃, 石製鏃, 玉類, 刀子, 土師器壺
	6	宮ノ平古墳群 2基	〃 〃 〃							
		宮ノ平1号墳	〃 〃 〃	丘陵上	31	○	○	○		碧玉車, 有孔円板, 玉類
		宮ノ平2号墳	〃 〃 〃	〃	29		○	○	粘土床, 粘土郭	碧石, 鉄鏃, 斧, 剣, 刀子, 滑石製臼玉
	6	八坂方墳	京都市東山区下河原町	〃	20	○		○		
	7－1	鴨ノ花古墳	京都府亀岡市篠町野条	平地	30		○		礫床	変形四獣鏡, 銅鏃, 柱甲, 剣, 直刀
	2	桝塚古墳	〃 〃 〃 下西	〃	33			○	木棺	三角縁変形四獣鏡, 丸縁素文鏡, 柱甲, 刀, 鉄鏃, 刀子
	3	坊主塚古墳	〃 〃 馬路町	〃	34				土壙墓？	三角縁変形四獣鏡, 短甲, 刀, 剣, 槍
	4	天神塚古墳	〃 〃 旭町市場	〃						
	5	弧塚古墳	〃 〃 千代川町	〃	35			○		
	6	君塚古墳	〃 〃 上矢田町	丘陵端						
	7	馬場ヶ崎1号墳	〃 〃 大井町	〃	16					
	8	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	26					
	8－1	成山古墳群 1基	〃 綴部市小西中山	丘陵頂						
		成山3号墳	〃 〃 〃	〃	20				木棺1，盛棺1	土師器

丹後	2	聖 塚 古 墳	京都府綾部市多田	平 地	45.5	○	○	○	粘土郭？	鏡,短甲,鉇,刀,鉾,矛,鉄鏃,青,勾玉,ガラス玉
	3	あやめ塚古墳	〃 〃 〃	〃	26	○	○	○		
	4	藤ノ木古墳	〃 高津藤ノ木	〃	25					
	9－1	宝蔵山古墳群 1基	〃 福知山市厚司	丘陵頂						
		宝蔵山4号墳	〃 〃 〃	〃	30				組合式箱形木棺,竪穴石室,土師器,須恵器	鏡,鉄鏃,管玉,刀子,鉾,斧,鎌
	2	八ヶ谷古墳	〃 〃 〃	〃	23				箱式棺3	玉類,竪柱形石製品,刀,鏃,鏡,刀子
	3	妙見古墳群 1基	〃 〃 〃							
		妙見1号墳	〃 〃 大門	丘陵端	42	○	○	○		
	4	高田山1号墳	〃 〃 中	〃	27					
	5	〃 2号墳	〃 〃 〃	丘陵鞍	23					
	6	中坂1号墳	〃 〃 土中坂	丘陵上	9.3					
	7	〃 2号墳	中坂西群 〃 〃 〃 〃	〃	12				箱形木棺	刀,刀子,鉄鏃
	8	〃 3号墳	〃 〃 〃 〃	〃	11					
	9	〃 9号墳	〃 〃 〃 〃	〃	8.8					刀
	10	斜 塚 古 墳	〃 夜久野町小倉	台 地	23					
丹後	10－1	斜 塚 古 墳	〃 丹後町藤石	〃	28	○	○	○		
	2	願興寺古墳群 2基	〃 〃 宮廻塚							
		願興寺4号墳	〃 〃 〃 〃	丘陵端	30	○	○		組合式箱形石棺	；(伝) 玉類
		〃 5号墳	〃 〃 〃 〃	丘陵鞍	25		○			
	11	円山古墳群 1基	〃 加佐町後野鳴	台 地						
		円山2号墳	〃 〃 〃	〃	16		○	○		
近江	12－1	長野4号墳	滋賀県伊香郡木ノ本町	丘 陵	23.5				木棺直葬？	土師器壺
	2	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	23.5				木棺直葬	剣,鉄鏃
	3	長山古墳群 1基	〃 〃 余呉町	丘陵上					〃	
		長山5号墳	〃 〃 〃	〃					〃	
	13	土塚古墳陪塚	〃 高島郡安曇川町							

表3．近畿地方における主要方墳一覧表(明確に後期群集墳に入るものは除いた)

では方墳が一辺15m、円墳が径5m～12mと小規模である。時期的には、須恵器を出土したものもあり後期に及ぶが、副葬品に、3号墳から刀剣、甲冑、4号墳から刀剣、鏃、玉、5号墳から刀子、須恵器、6号墳から小鉄片、3号墳南方の円筒棺から刀剣、鉄斧、ト石、工具が出土したと伝えられ、鞆富ではないが、武器、武具が多数を占めており、同地域の他の方墳と同様の傾向があり注意すべき点である。河内ではあまり知られておらず、山城地方では、大和同様、久津川古墳群中に見られる。ここでは、4世紀後半から5世紀初頭の古墳群がほとんどで、西山古墳群、平川古墳群、芝ヶ原古墳群等があり、円墳だけでなく、前方後円墳、前方後方墳等とも組み合って群を構成している。また、久世郡城陽町宮の平古墳群は5世紀後半のもので、造出し付きの方墳2基がほぼ接して築成され、これより約30m程西方に、やはり造り出し付きの円墳がある。方墳は一辺24.6m,25.29mで、剣、刀子、鉄斧、鉄鏃の武器類の他に、ト石、赫錘車、有孔円盤、臼玉等が出土している。

以上、畿内における方墳の有り方を見てきたが、まず第一に、天皇陵に比定される大型の前方後円墳の陪塚として多くの方墳が採用されている点に注意される。これは、大和、河内、和泉、山城において普遍的に見られ、中期方墳に限ってみればその半数以上を占めている。第二は、方墳の分布が地域的に集中している点である。大和では、北部の佐紀古墳群周辺と、南端の橿原市、五条市である。河内では古市誉田古墳群周辺に濃密に分布し、山城では久津古墳群周辺である。陪塚のなもの、及び大古墳周辺部を除き、中期方墳に限定すると、さらに第三として、特徴のある分布を示している。すなわち、大和では南端、特に、紀ノ川中流、紀伊国と大和の接点である五条市に集中分布し、山城では南端の宮ノ平古墳群を一応あげることができる。こうした傾向は河内や和泉では認め難い点である。

図27．近畿地方における主要方墳分布図（数字は表３の№と一致）

Ⅳ．分布の状況（近江における例）

近江では、長野古墳群第４・５号墳の他に、当古墳群北隣りの丘陵尾根に立地する余呉町長山古墳群中に１基、安曇川町田中・王塚古墳群中に数十基、安土町竜石山古墳群中に１基、その他、６カ所において方墳の分布が見られる。この中で、方墳か否か判断しかねるものも含まれており、その数量は今後前後する。ここでは、明確なものだけを取り上げる。また、竜石山古墳群は発掘調査が実施され、円墳４基と方墳１基が検出されているが、明らかに後期古墳群である。

さて、いくつかの方墳のうち、発掘調査の実施されたものに限ってみると、長山古墳群、桜内遺跡及び長野古墳群の３例がある。これらは、いずれも日本海地方（越前武生）との通路である北国街道の東側にある。長山古墳群はおよそ中期末葉のもので、15基の円墳と１基の方墳とから構成されている。主墳は円墳（４号墳）で、葺石を持ち、短甲、剣、刀、鉄、鉾、小刀、鉄斧等比較的豊富な副葬品を出土している。方墳を含む他のものは４号墳より墳丘高において小規模であり、副葬品も剣、鏃等で貧弱である。ただ、古墳群全体で、副葬品が武具と武器に限定されている点注意される。

桜内遺跡では、近接した円墳と方墳の周溝部分のみを検出している。円墳の周溝から須恵器が出土しており、後期に入る可能性もある。これら調査例の他は、上述の竜石山古墳群を除いて詳細は明らかでないが、安曇川町の田中・王塚古墳群では、全長70ｍの帆立貝式古墳の周辺に小前方後円墳１基、円墳４基、方墳43基が分布すると報告されているが、このうち方墳については、円墳であるものもあるであろうし、須恵器片の出土していることから、後期古墳も含まれるものとされている。また、高月町の平野部で、全長70ｍ程の前方後円墳（姫塚古墳）の南方にみち塚古墳と呼ばれる小墳があるが、これも方墳であるとされている。

近江国の方墳については不明な点が多いが、現在知られている範囲では、陪塚であるもの、円墳とともに群を構成するもの、方墳２基が独立して分布するものの三つのタイプに分けることができる。この中で、両丹地方、畿内との比較で注意すべき点は、まず、丹波亀岡盆地や福知山盆地で見られた様に、２基が相接して独立して分布する点である。第二は、丹波地方あるいは、大和五条市域のように、畿内と丹後、あるいは紀伊との交通上の要衝である点について、長野古墳群の位置が越前との交通路の入口に当っているという事に共通項があることである。また、五条市域で、西山・塚山・猫塚・荒坂青墓古墳の単独して分布する附近に、近内古墳群の小円・方墳群が存在するが、この点に関しても、長野古墳群の北隣りの丘陵尾根に、方墳一基を含む円墳群である長山古墳群が分布する。また、副葬品に関しても豊富ではないが武器・武具が主体であり、非常に共通項の多い有り方を示している。

Ⅴ．方墳の性格（近畿地方を中心に）

以上、各地の方墳の分布状況を、特に中期方墳を中心に見てきたが、この中で、次の点について注意される。

①．畿内中枢部では天皇陵クラスの大型前方後円墳の陪塚として多くの方墳が見られる。

②．陪塚的なもの以外では、特定の地域に分布する傾向がある。

①の点に関しては、大和、河内、山城に顕著に見られ、和泉や近江等にも若干見受けられる。

②の点に関しては、畿内では、大和の五条市域、山城ではその南端、木津川流域、畿外では、丹波の亀岡盆地、福知山盆地の綾部及び福知山市域、近江の湖北平野最北端である。これらの地域は、いずれも交通路の要衝を占めている。すなわち、大和の五条市域は、紀ノ川を下って紀伊に入る大和川の入口に当る。亀岡盆地は、山城から若狭、丹後へぬけ、しいては、北陸、山陰地方へ通ずる交通路の門戸に当り、福知山盆地は、その中間点で、一方は若狭、他方は丹後あるいは伯耆に至る分岐点である。山城の木津川流域は伊賀から尾張へと通じ、近江湖

北平野北端は、湖上通路を経由して、北国街道から越前へ至る交通路の門戸である。こうした点に加え、亀岡盆地や五条市域、湖北平野北端部等の方墳からは、武器を主体とした副葬品が出土しており、中期末を前後し、やはり武器、武具類を若干数副葬する小形墳群が近隣に分布していることをあげることができる。

このように、方墳、特に中期方墳の分布状況は、大和・河内を中心に、畿外周辺に向けて、各門戸をおさえる形で方墳が配されている状況がうかがえる。陪塚的なものをも含めて、中期方墳の副葬品が武具、武器が主体であることは、畿内周辺に対する防備あるいは攻撃面を考慮した配置であることがうかがえるのである。この場合、方墳が畿内中枢部において、天皇陵クラスの陪塚的存在として分布することを考えると、その被葬者は大和朝廷と非常に関係の深い者ではないかと考えられる。亀岡盆地や福知山盆地において、前方後円墳が近隣するが、この事は大和五条市域に対し、北方御所市の鉢子塚古墳、山城宮ノ平古墳群に対する車塚古墳、長野古墳群に対する南方平野部の物部古墳群等の存在と対比し得る現象であろう。すなわち、一方に在地首長属系列の墳墓があり、他方に、要所に配された方墳が存在するという見方を取ることも可能であろう。

Ⅵ．方墳の問題点

以上、方墳、特に中期方墳について、その性格に関する若干の見通しを述べてみたが、方墳についての問題点は多い。一つに、一辺10m前後の方墳と20m以上のものとの性格の差異、前期古墳群における方墳の位置、陪塚における他墳形との比較等々である。方形墳は弥生時代のいわゆる方形台状墓と同形であり、これと古墳時代前期初頭の方墳との関係も以降の方墳との関係を考える上で重要であろう。また、大陸墓制との関連も考えなくてはならないであろう。これら多くの問題については、稿を改めて考えてみたい。

注

①.『平城宮跡発掘調査報告』Ⅵ（奈良国立文化財研究所．昭和50年）

②.前掲書①

③.徳丸始朗他「長岡京跡左京三条二坊第二次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会．昭和51年）

④.田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ．昭和41年）

⑤.鬼柳彰「中山古墳」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ．昭和51年）

⑥.『世界考古学大系』３日本Ⅲ（昭和34年）

⑦.別所健二他「黄牛塚古墳」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ．昭和51年）

⑧.前掲書⑥

⑨.田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年 —— 最近の調査例を中心に ——」（『近江地方史研究』第３号．昭和51年）

⑩.前掲書③

⑪.鬼柳彰「四郷崎古墳」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅱ．昭和51年）

⑫.『坂田郡誌』上巻

⑬.前掲書⑤

⑭.前掲書⑦

⑮.田中勝弘「上ノ山古墳群」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ．昭和51年）

⑯.田中勝弘「諸跡山古墳群」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ．昭和49年）

⑰.前掲書⑯

⑱.玄室幅指数＝玄室幅／玄室長×100，羨道幅指数＝羨道幅／玄室幅×100（白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」（『古代学研究』42・43合併号．昭和41年）

⑲.田中勝弘「鉛練古墳」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅳ．昭和53年）

⑳.水野正好「群集墳と古墳への終焉」（『古代の日本』５近畿．昭和45年）

㉑.西川宏「方墳の性格と諸問題」（『私たちの考古学』第５巻第３号．昭和34年）

㉒.『両丹地方の方墳』（常設展資料４．京都府立丹後郷土資料館．昭和53年）

㉓.昭和52・53年度に発掘調査実施

㉔.水野正好他「竜石山古墳群」（『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』．昭和40年）

㉕.前掲書㉒

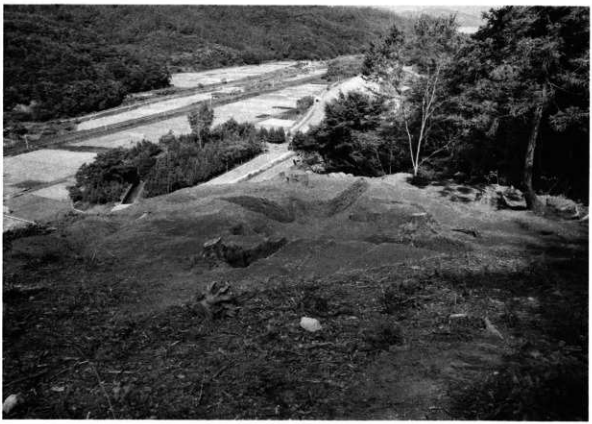
㉖.山田良三「山城の方墳」Ⅰ・Ⅱ（『古代学研究』47・48．昭和42年），森浩一他「畿内およびその周辺」（『日本の考古学』Ⅳ古墳時代上．昭和42年），小島俊次『奈良県の考古学』（昭和44年）

1　黒田長野古墳群航空写真

2　同上　第5号墳よりの遠望(北を望む)

1　黒田長野古墳群　第1号墓遠景

2　同上　近　景



1　黒田長野古墳群　第1号墓遠景(石組除去)

2　同上　近　　景(石組除去)

1　黒田長野古墳群　第２号墳全景（南より）

2　同上　横穴式石室全景（東より）

1　黒田長野古墳群　第２号墳横穴式石室全景(北より)

2　同上　近　　景(北より)

1　黒田長野古墳群　第２号墳横穴式石室近景(東より)

2　同上　近　　景(閉塞石除去、東より)

1　黒田長野古墳群　第２号墳閉塞状況(南より)

2　同上　(東より)

1　黒田長野古墳群　第2号墳奥壁コーナー石積み状況(北西コーナー)

2　同上　玄室東壁遺存状況

1　黒田長野古墳群　第2号墳羨道東壁

2　同上　羨道東壁石積み状況(北より)

1　黒田長野古墳群　第4・5号墳全景(北東より)

2　同上　第4号墳全景(北東より)

1　黒田長野古墳群　第4号墳主体部(?)(発掘前)

2　同上　(発掘後)

1　黒田長野古墳群　第４号墳壺棺？（発掘前）

2　同上　（発掘後）

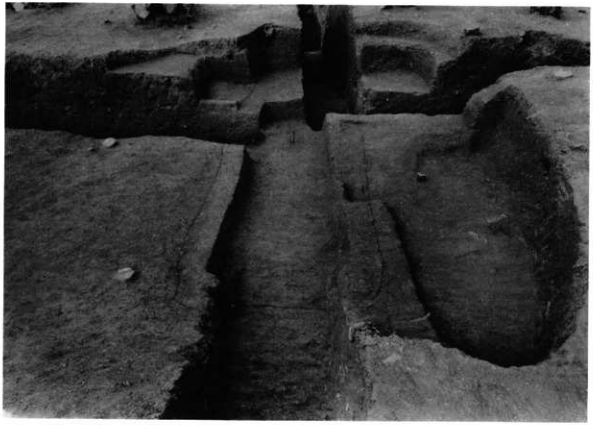
1　黒田長野古墳群　第４号墳SEトレンチ(東より)

2　同上　(西より)

1　黒田長野古墳群　第４号墳SWトレンチ(北より)

2　同上　(北より)

1　黒田長野古墳群　第５号墳全景(北東より)



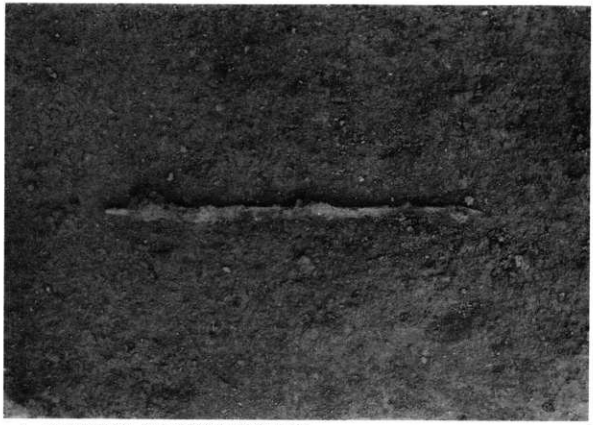
2　同上　主体部(南より)

1　黒田長野古墳群　第5号墳主体部(東より)

2　同上　主体部近景(東より)

1　黒田長野古墳群　第５号墳墓壙(北より)

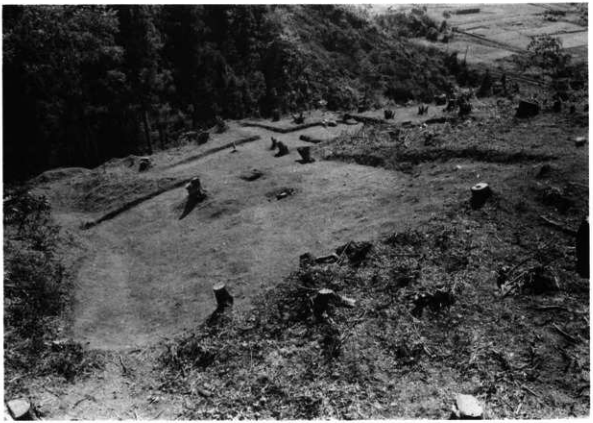
2　同上　(西より)



1　黒出長野古墳群　第５号墳鉄剣出土状態(西より)

2　同上　鉄鏃出土状態(東より)

1　黒田長野古墳群　第5号墳NEトレンチ(北より)



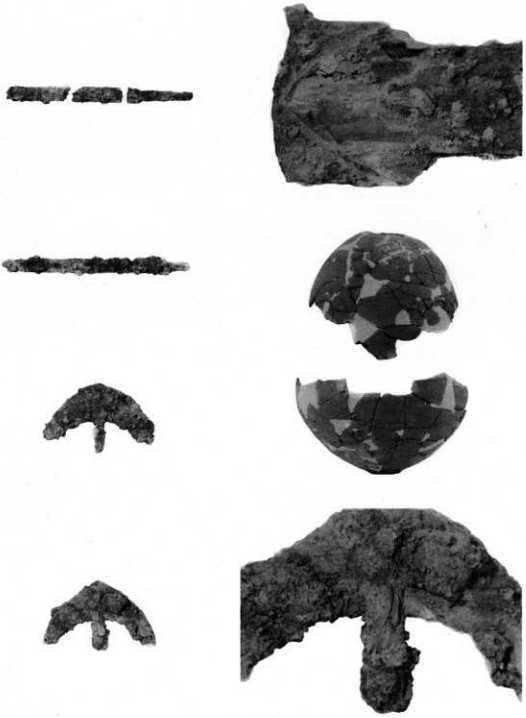
2　同上　SEトレンチ(北より)

1　黒田長野古墳群　第5号墳SWトレンチ(北西より)

2　同上　NWトレンチ(南東より)

黒田長野古墳群　第1号墓出土遺物

黒田長野古墳群　第２号墳出土遺物



黒田長野古墳群　第４・５号墳出土遺物

第二章　木ノ本町黒田東山遺跡

目　　次

第2章　黒田東山遺跡

1．調査経過……57

2．調査結果……57

イ）．遺　　構……57

Ⅰ．1号周溝状遺構……57

Ⅱ．2号　〃　……57

Ⅲ．3号　〃　……57

Ⅳ．土　壙1……61

Ⅴ．　〃　2……61

Ⅵ．溝……61

ロ）．遺　　物……61

Ⅰ．弥生式土器……61

Ⅱ．須恵器……61

3．小　結……61

挿図目次

図1．黒田東山遺跡トレンチ断面土層図（上：第1トレンチ，下：第2トレンチ）…58

〃2．　〃　地形測量図及びトレンチ遺構図……59

〃3．　〃　出土遺物実測図……60

図版目次

図版一．（上）黒田東山遺跡1号周溝（発掘前）

（下）　〃　〃　断面

〃二．（上）　〃　〃　（発掘後）

（下）　〃　〃　断面

〃三．（上）　〃　2号周溝

図版三．（下）黒田東山遺跡２号周溝

〃 四．（上）　〃　第２トレンチ（発掘前）

（下）　〃　〃　断面

黒田東山遺跡

石原　道洋

1．調査の経過（図1・図2－上）

黒田東山遺跡は長野古墳群の南隣、舌状の細尾根上に立地するものであるが、北陸自動車道建設工事に伴う当該地の樹木伐採中に、平坦な尾根筋に若干の起伏が認められ、遺跡である可能性の強いものであることが知れたのである。急拠日本道路公団と協議を持ったが、発見当時、自動車道関連遺跡である黒田長山遺跡、桜内遺跡、黒田長野古墳群の3カ所で並行して発掘調査中であり、調査体制の確保に困難を極めた。結果的には、黒田長野古墳群の調査終了後、東山遺跡に体制を移行させ、発掘調査を実施することとした。

調査は、工事の進捗状況に応じて、尾根の西端から山側奥部へ進むという方法を取ったが、結局、尾根西端1カ所、尾根の平坦部に1カ所のトレンチを設定したのにとどまり、その中間、『風穴』と呼ばれる蚕の越冬用の構築部分を含めて、約100m程の範囲は未調査に終ってしまった。

2．調査結果

イ）．遺　構（図2）

今回の調査で検出した遺構は、第1トレンチで周溝状遺構2基、第2トレンチで周溝状遺構1基、土壙状遺構数基である。

Ⅰ．1号周溝状遺構（図1－中）

第1トレンチ東側の周溝状遺構で、ほぼ方形に一周する。一辺約10mを計る。調査前では、この部分に高さ2m程の小高い盛り上りがあったが、この盛土は新しいもの（『風穴』築造時のものか）であって、周溝状遺構とは関連性のないものであることが判明した。この下層に黒色系の腐植土の堆積が確認でき、この土層中に数片の弥生式土器片が出土した。

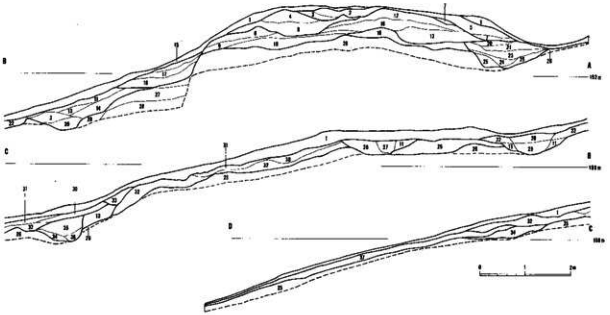
Ⅱ．2号周溝状遺構（図1－中）

1号周溝状遺構の西隣りにあり、切り合いはない。2号の場合、溝はコの字形にめぐり、西辺の溝は接続せず、陸橋部をもつ。2号周溝状遺構の場合、若干の盛土が残っていたが、西辺の周溝はこの盛土を切り込んで掘穿されている。周溝内側で、3m×1.7m、深さ約0.5mの横断面摺り鉢状の落ち込みがあったが、主体部か否かは判然としない。周溝から弥生式土器片とともに須恵器（6世紀中頃）片が出土している。

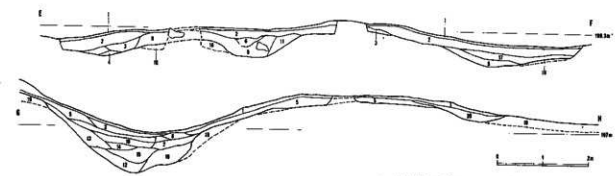
なお、2号周溝状遺構以西では遺構は認められなかった。

Ⅲ．3号周溝状遺構（図1－下）

3号は、L字状に屈折する溝を残すのみである。2本の溝の内側中央に、40cm～50cm大の石が散乱していたが、特にまとまりがなく、遺構とはいい難いものであった。この附近からは須恵器片が比較的多く出土している。



1．黄茶褐色粘質土
2．黒色粘質土
3．淡黒色粘質土
4．明赤茶褐色粘質土
5．赤褐色粘質土
6．淡赤褐色粘質土
7．赤茶褐色粘質土
8．淡赤褐黒色粘質土
9．明赤褐黒色粘質土
10．暗赤褐黒色粘質土
11．淡黒茶褐色粘質土
12．淡黒赤褐色粘質土
13．黒茶褐色粘質土
14．明黒褐色粘質土
15．明茶褐色粘質土
16．赤褐黒色粘質土
17．淡褐黒色粘質土
18．茶褐黒色粘質土
19．明茶褐黒色粘質土
20．淡黒褐色粘質土
21．暗黒茶褐色粘質土
22．淡茶褐黒色粘質土
23．茶黒色粘質土
24．暗黒色粘質土
25．茶褐色粘質土
26．赤褐色粘質土
27．暗茶褐斑糎粘質土
28．暗褐色粘質土
29．淡褐色粘質土
30．淡黒茶褐色腐植粘質土
31．淡茶褐黒色腐植粘質土
32．茶褐黒色腐植粘質土
33．明黄茶褐色粘質土
34．黒褐色混砂粘質土
35．黒色腐植粘質土
36．暗茶褐色腐植粘質土
37．黄褐黒色腐植土



1．黄茶褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．淡灰褐色粘質土
4．明灰褐色粘質土
5．明黄褐色粘質土
6．暗黄褐色粘質土
7．褐灰色粘質土
8．明褐灰粘質土
9．淡黄褐色粘質土
10．暗茶褐色粘質土
11．赤褐色粘質土
12．黄褐色粘質土
13．暗褐色腐粘質土
14．暗褐色斑糎粘質土(多く含む)
15．黒褐色斑糎粘質土
16．明赤褐色粘質土
17．淡黒褐色粘質土
18．明黄茶褐色粘質土
19．明褐色粘質土
20．暗褐黄色粘質土

図1．黒田東山遺跡トレンチ断面土層図（上：第1トレンチ，下：第2トレンチ）

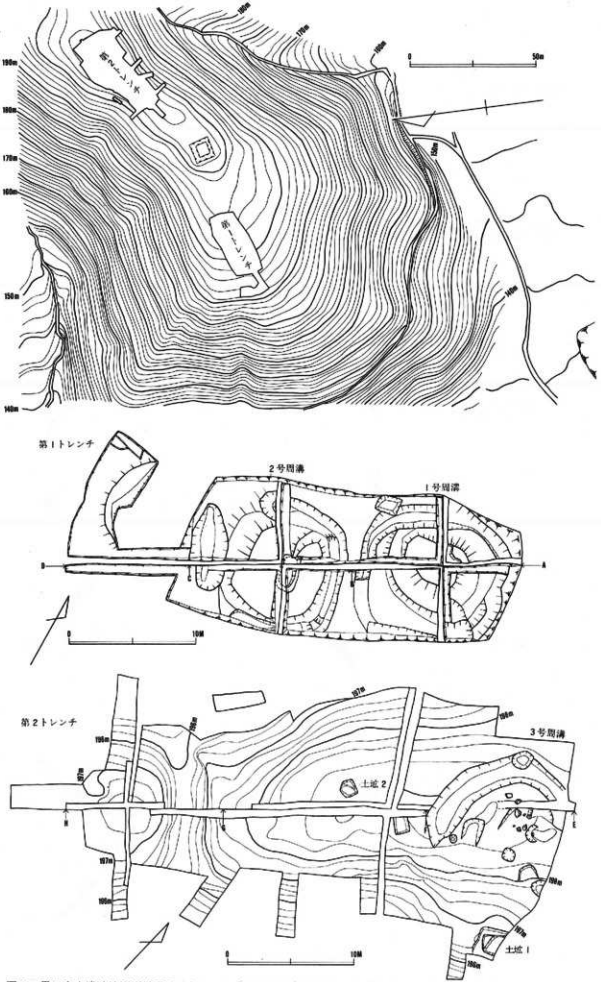


図2．黒田東山遺跡地形測量図及びトレンチ遺構図（上：地形図，中：第1トレンチ，下：第2トレンチ）

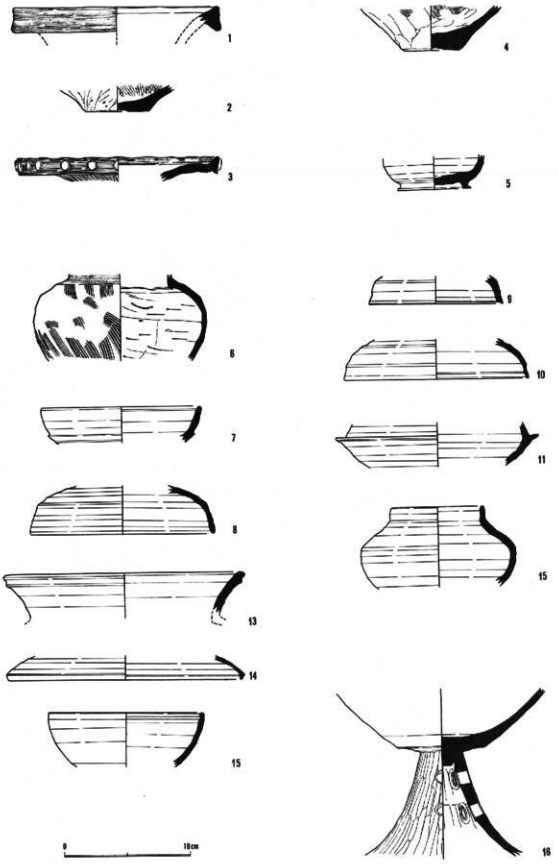


図３．黒田東山遺跡出土遺物実測図

Ⅳ．土　　壙１（図１－下）

３号周溝南側斜面に一辺約２ｍの落ち込みがあった。壙底は東へ傾斜しており、人工的なものかどうか明確にできなかった。遺物は表土に近い部分から須恵器片が出土したが、土壙内からは出土しなかった。

Ⅴ．土 壙 ２（図１－下）

３号周溝状遺構西側約10ｍの地点で、径30cm程の落ち込みがあった。性格は不明である。

Ⅵ．溝（図１－下）

３号周溝状遺構の西方約30ｍのところに、尾根を切断する幅５ｍ、深さ約80cmの溝があった。発掘前の表面観察の段階から認められたもので、性格は不明である。遺物は皆無であった。

ロ）．遺　　物（図３）

当遺跡からは弥生式土器及び須恵器が出土しているが、いずれも小片である。弥生式土器は後期後葉、須恵器片は６世紀中葉以降及び８世紀後半のものである。

Ⅰ．弥生式土器

１号周溝状遺構出土の壺口縁（１）は、頸部が直立から外反し、口縁端部が肥厚する。（３）は器台かと思われるもので、口縁端部が上方に突きでており、、受部も扁平になっている。

３号周溝状遺構出土の壺胴部（５）はかなり膨れており、外面の調整もやや雑である。頸部は短かいと思われる。壺底部（２・４）も安定した平底である。この他、実測不可能であるが、高杯片が出土している。

以上は、弥生時代の要素を残すものであり、後期後葉に位置付けられよう。また、１号周溝状遺構の周溝からは古墳時代以降の遺物がなく、出土遺物の年代におさまるものと考えられる。第３号周溝状遺構の場合、須恵器片の出土もみており、時期の断定はできない。

Ⅱ．須 恵 器

須恵器は、ほとんど６世紀中葉から後葉のものであるが、（14）の蓋、（６）の高台付壺は８世紀後葉まで下るものであろう。

３．小　　結

黒田東山遺跡は、丘陵尾根上にあって、南は湖北平野を一望でき、北は柳ヶ瀬断層谷が見通せる位置にある。あるいは高地性集落の存在も考えられたが、結果的に方形周溝状遺構３基を検出し得た。この年代については、１号周溝状遺構の溝内より、弥生時代後期後葉のみの土器片が出土しているので、ほぼこの頃に比定できるが、他のものについては、須恵器片等も混在していて判然としない。

次に、６世紀中頃から７世紀にかけての須恵器片、８世紀後葉の須恵器片が出土しているが、前者については、後期古墳の存在していた可能性が考えられる。又、後者については、隣接する長野古墳群で、平安時代前期の古墓かと思われるものを検出しており、同様の性格の遺構の存在も考えられよう。

No.	器形	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
1	弥生・壺	＊口縁端部が肥厚垂下するタイプの壺口縁部である。 ＊厚手である。	＊内面は丁寧なナデ調整、外面はヨコナデ調整を行う。	＊(色調)淡褐灰色 ＊(胎土)0.5～2㎜大の砂粒(チャート)を多く含む。 ＊(焼成)良好
2	弥生・壺	＊安定した平面の壺底部である。 ＊底面中央部がやや窪み、あげ底の気ざしをみせている。	＊内面は荒いハケ状工具でかき上げているが、底面はさらに指ナデ調整を行う。 ＊外面はヘラで削っている。	＊(色調)褐灰色 ＊(胎土)1～2㎜大の砂粒を含む。 ＊(焼成)良好
3	弥生・器台	＊受部が外反気味に開き、口縁部で上下に肥厚し外端面をなす。 ＊外端部に円形浮文を貼付する。 ＊口縁部上面がウェーブする。	＊内外面ともに細かいタテヘラ研磨を施すが、口縁部内面及び外端面はヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡褐灰色 ＊(胎土)精緻 ＊(焼成)良好
4	弥生・壺	＊厚い底部である。 ＊底面中央部がやや窪むが安定した平底である。	＊内外面ともにハケ調整を施したのち、指ナデにより仕上げている。	＊(色調)灰褐色 ＊(胎土)1～2㎜大の砂粒を含む。 ＊(焼成)良好
5	弥生・壺	＊薄手の長頸壺の胴部である。 ＊体部は肩が張り、やや扁球形を呈する。 ＊頸部は直立するようである。	＊体部内面はヨコにヘラ削りをする。 ＊外面はタテにハケで調整を行なう。 ＊頸部は付け根に関してはヨコナデ調整を行なうが上部は不明である。	＊(色調)褐色 ＊(胎土)良好 ＊(焼成)良好
6	須恵・杯身	＊径の小さい杯身である。 ＊高台は外方につまみ出される。 ＊厚手である。	＊内外面ともにヨコナデ手法。但し底面はヘラで削っている。	＊(色調)淡灰色 ＊(胎土)1～2㎜大の長石を少し含む。 ＊(焼成)良好 ※ロクロ右まわり
7	須恵・杯蓋	＊天井部と体部との境が明瞭な稜で画される。 ＊体部はやや外方に開く。 ＊口縁端部は丸く、内側に溝を有する。	＊内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)暗灰色 ＊(胎土)良好 ＊(焼成)良好 ※ロクロ右まわり。
8	須恵・杯蓋	＊天井部と体部との境の稜は甘く口縁端部も丸い。	＊天井部外面ヘラ削り調整、その他の部分はヨコナデ調整である。	＊(色調)淡灰色 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
9	須恵・杯蓋	＊径のわりに厚手の杯蓋である。 ＊天井部と体部の境は甘い稜をなし、体部は外方に開く。 ＊口縁端部は内傾する端面をなし、やや窪む。	＊内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡灰色。 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
10	須恵・杯蓋	＊弯曲する天井部が口縁部でつまされて外反し、端部は丸い。 ＊口縁部内面に稜をなす。	＊内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡灰色。 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
11	須恵・杯蓋	＊体部と底部とは弯曲して接し、明瞭な稜をなさない。 ＊立ち上がりは内上方へのびるが口縁を欠く。	＊底部外面をヘラ削りするほかヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡灰色。 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
12	須恵・短頸壺	＊頸部はほぼ直立し、口縁端部は丸い。 ＊体部肩がやや張る。	＊底部外面をヘラ削りするほかヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡灰褐色 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。

No.	器形	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
13	須恵・壺	＊外反する口縁部は端部で外側にやや肥厚する。	＊内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)淡灰色 ＊(胎土)良好 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
14	須恵・杯蓋	＊器壁が薄い。 ＊内湾する天井部の口縁部が下方につまみ出される。	＊内外面ともにヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)灰色 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。
15	須恵・埦	＊丸やかに弯曲する体部と底部は明瞭な境をなさない。 ＊口縁部内側に沈線が一条廻る。	＊底部外面をヘラ削りするほかヨコナデ調整を行なう。	＊(色調)暗褐灰色。 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。 ※ロクロ右まわり。
16	土師・高杯	＊深く大きな杯部を有する。 ＊脚部はゆったりと裾が拡がる。 ＊3方2段透しである。	＊杯部は不明であるが、脚部は外面がタテヘラ研磨を行ない、内面は指ナデによる調整である。	＊(色調)褐色。 ＊(胎土)良好。 ＊(焼成)良好。

○1・2・3は第1トレンチ1号周溝内検出。

○4は　〃　2号周溝内検出。

○6は　〃　1号周溝東側より検出。

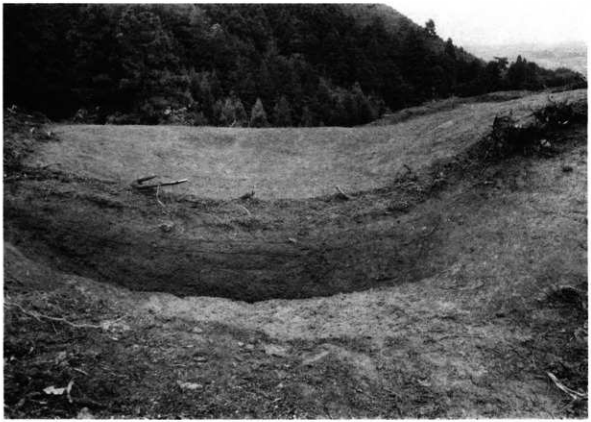
○5は　第2トレンチ3号周溝内第2層より検出。

○7～13は　〃　東側第2層より検出。

○14・15は　〃　〃　第1層（表土）より検出。

○16は黒田長野古墳群第5号墳墳丘盛土内より検出。

1　黒田東山遺跡　1号周溝(発掘前)



2　黒田東山遺跡　1号周溝断面

1　黒田東山遺跡　1号周溝(発掘後)

2　黒田東山遺跡　1号周溝断面

1　黒田東山遺跡　2号周溝

2　黒田東山遺跡　2号周溝

1　黒田東山遺跡　第２トレンチ(発掘前)

2　黒田東山遺跡　第２トレンチ断面

第三章　近江町円光寺遺跡

目　　次

第三章　円光寺遺跡

1．位置と環境……69

2．調査経過……69

3．調査結果……71

4．発掘日誌(抄)……71

挿図目次

図1．円光寺遺跡A・B地区位置図……69

〃2．　〃　A地区地形測量図及びグリット配置図……70

〃3．　〃　B地区地形測量図及びグリット配置図……70

〃4．　〃　グリット断面土層図……71

図版目次

図版一．(上)円光寺遺跡A地区全景（北より）

(下)　〃　〃

〃二．(上)　〃　〃　グリット

(下)　〃　〃　〃

〃三．(上)　〃　〃　〃

(下)　〃　B地区全景

円光寺遺跡

谷口　義介

1．位置と環境

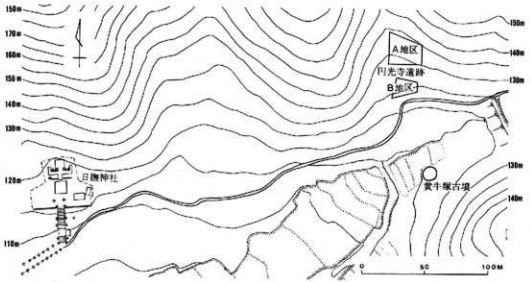


図1．円光寺遺跡A・B地区位置図

円光寺遺跡は、坂田郡近江町顔戸字円光寺に所在する。地形的には、長浜平野の東限を画して南北に連なる横山丘陵が、その南端で三分枝するうちの西尾根の北側山麓に位置している。微地形的にみると、顔戸集落の南はずれから東方へ深く食い入る谷懐の北斜面にある。狭い谷水田をはさんだ南側の山裾には黄牛塚古墳があり、また式内日撫神社も西方に存在する（図1）。

2．調査経過

この地域が発掘調査の対象となったのは、次の三つの理由からである。

㈠A地区は、南側が開けてわずかに谷懐を望みうるだけで、他の三方は急傾斜をなしているにも拘らず、この一画のみ斜面をカットして、平坦地を造っていること（図2）。B地区は、A地区と同一斜面の南下段にあり、三角形の平坦面をなしていること（図3）。

㈡小字名が円光寺で、かって寺院が存在した可能性があること。なお附近には、日光寺、仏光寺等の地名も散見する。

㈢昔、この附近に寺院が建っていた、という伝承が地元に残されていること。

以上三つの根拠に基づいて、この区域に何らかの寺院址の存在を推定し、発掘調査を試みたわけである。

調査は、用地未買収などの理由によって二次に亘り、A地区を1975年5月に、B地区を1976年10月末に、それぞれ別けて実施した。

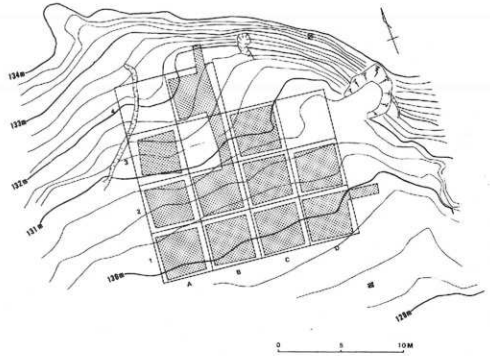


図２．円光寺遺跡Ａ地区地形測量図及びグリット配置図

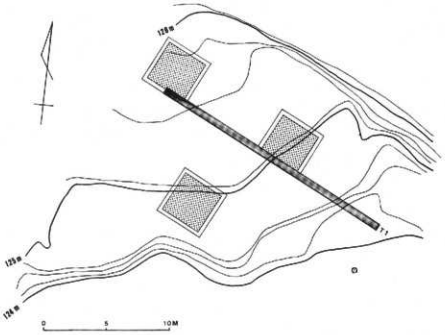


図３．円光寺遺跡Ｂ地区地形測量図及びグリット配置図

イ）．Ａ地区

初め地形測量を行った後、グリッドを設定し、順次掘り下げを開始した（図２）。計11グリッドを各70cm程掘り下げたが、遺物は皆無、遺構らしきものも認められなかった。ついでＴ１、Ｔ２の２本のトレンチを設定し、１ｍ程掘り下げてみたが、粘土層・腐植土層・礫まじり粘土層などが自然に堆積するのみで、人工の加わった痕跡は何ら認められなかった（図４）。

ロ). B 地 区

平板で地形測量を行った後、グリッドを３ヶ所設定し、各50cm掘り下げたが、A地区と同様、遺物は皆無で、遺構も検出しえなかった。念のため、トレンチを１本掘り下げてみたが、結果は同様であった（図３・４）。

3．調査の結果

以上、二次に亘る発掘調査の結果、A・B両地区とも、遺物・遺構を見出すことができなかった。したがって、当初推定していた寺院址を確認することはできず、いわゆる円光寺遺跡なるものの存在は明確に否定されることが判明した。

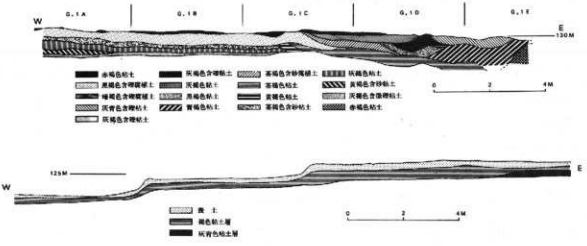


図４．円光寺遺跡グリット断面土層図

4．発掘日誌(抄)

イ). A 地 区

●1975年５月７日

終日快晴、まさに初夏の陽気。野鳥の声しきり。メジロ捕りの人。

昼前までテント張り、午後から平板測量。25cmコンタ。

●５月13日

日中曇天、平板測量、漸く完了。

●５月14日

雨、午後あがり、グリッド掘り開始。G・２Aから。表面に流土所々、その下が本来の表土。

●５月15日

晴、午後曇り、蒸し暑し。

G・４B・３Bなどグリッド掘り。表土下まで。粘土中に礫多くまじる。

●５月16日

今日より作業員入るも、仕事きつく、半日にして帰る人も。

G・4B内、赤色粘土、黒褐色粘土、褐色砂まじり粘土の層序。礫多し。

● 5月17日

午前中小雨。午後から晴れ。

G・3C・2C・3A・2A等各グリッド、遺物なし、遺構も見当らず。

● 5月20日

終日曇天、北の強風、時雨。

G・2A・2B・3A・4B等、表土下70cmまで。

● 5月22日

日中快晴。

G・1A・1Bその他、掘り下げ開始。遺物・遺構なし。

● 5月23日

快晴、暑きこと盛夏の如し。

トレンチ2本設定。南－北をT1、東－西をT2。土層は自然に堆積せるものにして、人工の加わりし跡見えず。断面実測。

● 5月24日

曇り、時に晴れ。

T2を東に延長。断面実測。

発掘調査終了。結局、遺物・遺構皆無にして、寺院址の存在、明確に否定さる。徒労の感深し。

ロ). B 地区

●1976年10月26日

日中快晴なれど、風強く、寒し。平板にて地形測量。

昨夏調査の黄牛塚古墳、北縦盛土下に埋もれて、附近の景観も旧往とどめず。

●10月29日

日中、西風強し。夕刻より風北に変じ、みぞれ降り来たる。寒さ著し。

グリッド掘り2ヶ所試みるも、遺物なく、遺構も検出しえず。山裾を削りて平坦地となし、田畑に利用せるものか。

●11月1日

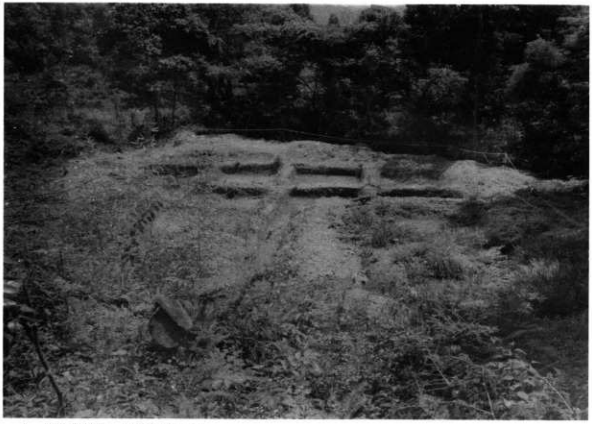
グリッド掘り更に1ヶ所。トレンチ1本設定して掘り下ぐるも、遺物・遺構出ず。

午後より、トレンチの断面実測。

夕刻、作業終了。何らの遺跡もなし、と断定。

1　円光寺遺跡　A地区全景(北より)

2　円光寺遺跡　A地区全景(北より)



1　円光寺遺跡　A地区グリット

2　円光寺遺跡　A地区グリット

1　円光寺遺跡　A地区グリット

2　円光寺遺跡　B地区全景

第四章　黒田長山イ号墳(仮称)

目　　次

第四章　黒田長山イ号墳(仮称)

1．位置と環境……77

2．遺　　構……77

イ)．墳　　丘……77

ロ)．内部主体……77

Ⅰ．掘　方……77

Ⅱ．石　室……77

Ⅲ．床　面……80

3．遺　　物……80

4．ま と め……80

挿図目次

図1．黒田長山イ号墳墳丘断面土層図及び地山整形状況図……78

〃2．　〃　横穴式石室実測図……79

〃3．　〃　出土遺物実測図……80

図版目次

図版一．(上) 黒田長山イ号墳遠景

〃　(下)　〃　全景

〃 二．(上)　〃　横穴式石室全景

(下)　〃　〃

〃 三．(上)　〃　玄室側壁

(下)　〃　〃

〃 四．(上)　〃　奥壁

(下)　〃　奥壁裏込め状況

黒田長山イ号墳(仮称)

葛野　泰樹

1．位　　置

黒田長山イ号墳は滋賀県伊香郡余呉町坂口長山に位置する。古墳は余呉川へ東より舌状にのびる丘陵の南側斜面裾部に構築されている。

当丘陵上および斜面には数多くの古墳が築造されており、その数は20基を下らない。これらはすべて木棺直葬を内部主体としているのに対し、当古墳のみ横穴式石室を内部構造としている。また、当古墳は標高約140ｍを測るように、長山古墳群中一番低い位置に立地する。

この長山の前面には、竪穴住居、掘立柱建物を中心とした桜内遺跡が位置し、その南側丘陵上には前章で述べられた長野古墳群がある。その他周辺には上ノ山古墳群、大門古墳群等多くの遺跡が北国街道に沿って立地している。

2．遺　　構

イ)．墳　　丘

古墳は丘陵の最も裾部に位置し、それも比較的急峻な個所に築造され、墳丘はすべて流出していたため、当初、当地に古墳が構築されているとは予想だにしえなかった。

墳丘は山側に浅い切り込みが認められ、それが、東西に円く溝状にのびるところから、墳丘の裾部と判断した。しかし、谷側の裾は流出により明確になしえない。規模は東西方向の溝最深部心々距離で6.3ｍを測る小型の古墳である。墳丘の高さは、わずかに地山上に盛土が約0.5ｍ残存するのみで、丘陵の傾斜と自然に移行するごとく、封土は皆無といってよく原状は知りえない。

ロ)．内部主体

Ⅰ．掘　　方

横穴式石室を構築するため、斜面を南北に4.5ｍ、東西３ｍ、深さ山側で1.3ｍ、東西で0.3～0.4ｍ掘り込み、さらに石室部にいたって山側で0.8ｍ、東西で0.1～0.3ｍ掘り込む。石室の基部はこの土壙の地山面上に築かれている。しかし、この土壙の平面面積では石室規模に不足すると推察され、前方の斜面には盛土がほどこされていたと思われる。

Ⅱ．石　　室

石室の内部構造は、袖のない横穴式石室で、斜面の等高線に対し直交するごとく南方に開口する。石室の遺存状態は、天井部はなく側石とみられる石もかなり内側へ落ち込み、さらに石室前部は完全に消失しているようにかなり破壊されていた。

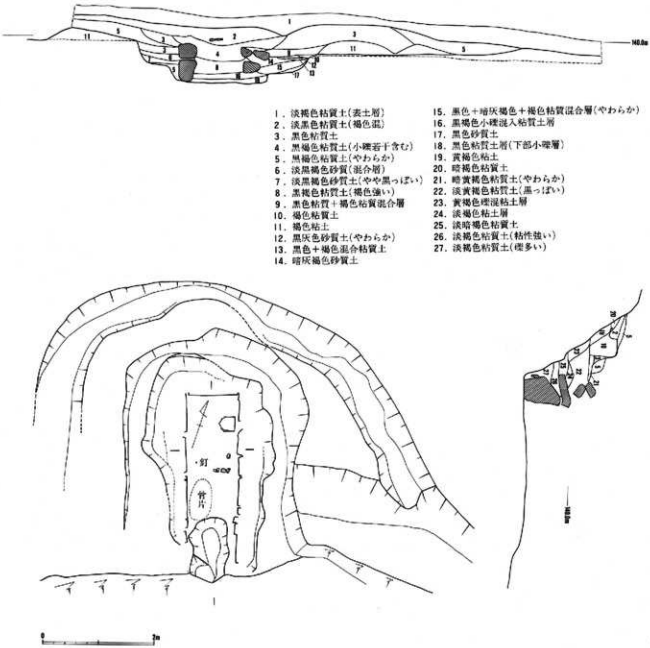


図1．黒田長山イ号墳墳丘断面土層図及び地山整形状況図

なお、右側壁には奥壁より2.1mの位置に長方形の小石が1石立てられており、柚を意識したものと思われ、石室は玄室と羨道との区別を明確にしてよい構造を呈している。

石室の規模は現存長で3.15m、玄室長2.1m、幅は奥壁付近で0.9m、中央で0.94m、羨道で0.87mを測り、現存最大高で床面より1.13mを測る。主軸はN10°49′Wを示す。

石材は比較的角ばった自然石を使用する。当地で採取したものであろう。石積み法は奥壁は基底部に三角形に近い大きな石を1石立て、三角形の両肩部に石を斜めに詰め、その上に横長に2段目を2石乗せる。壁面はこの

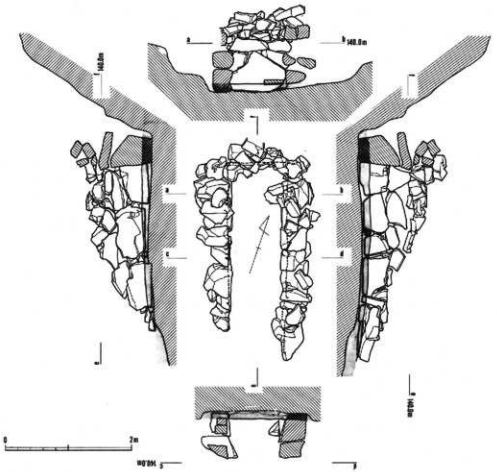


図２．黒田長山イ号墳横穴式石室実測図

部分まで垂直で面はそろう。３段目からはやや小振りの石を小口積みに積み上げるが、面は整のわず不規則である。側壁は両側とも羨底部を横長に置き、奥壁側は奥壁基底石をはさみ込むように置く。２段目は基底石の約２分の１の大きさの石を横積みにし、３段目より奥壁と同様小口積みに積む。ただ、基底部は左壁の方が大きく３石である。

天井高については、天井部を知る資料は何ら遺存しておらず、推定の域を出ないのであるが、壁面の３段目から小口積みが採用され、持ち送り手法へ移行する傾向にあるところから、おそらく床面より1.5ｍ前後はあったろうと思われる。

なお、羨道部に相当する部分には右壁の基底部１石しか遺存しておらず、全容は知りえない。しかし、墳丘径を玄室中心より復原すれば、おおよそ石室全長は４ｍはあったと思われることから、羨道は２ｍ位は有していたと推測される。

石室の構築法をみて注目されることは、奥壁、側壁とも基底部、２段目、３段目と石材の大きさがそれぞれの段で揃い、上段になるにしたがい小型化する。さらに、３段目からの小口積みは、側壁と奥壁との接点に石材を傾めに架す。そのため、３段目よりコーナーは丸味をもつ。これは、各段の作業がほぼ同時に進行していった証しであろう。

Ⅲ．床　面

玄室内には敷石等の施設はなく、地上面の上に10cm位の黒（褐）色粘質土層を敷き埋葬面としている。床面は入口にむかってやや傾斜するもほぼ水平とみてよい。床面からは棺台と思われる石材や鉄釘片を検出した。棺台とみられる石材は0.3×0.32mの上部平坦な割石１個と、0.1m位の自然石５個とからなり、石壁側より検出した。鉄釘は１本のみ左壁側より出土したが、その出土状況から原位置は留めていないと思われる。

以上のことから棺は木棺と想定され、棺の大きさについては、石材の配置から長辺1.5m位、短辺0.7m前後はあったろうと思われる。この床面の他埋葬面は認められず、当古墳は単次葬であったと考えてよいであろう。

3．遺　物

図３．出土遺物実測図

特に記する遺物はなく、ただ埋葬面より鉄釘片１本と現存羨道石壁側より須恵器細片の２点が出土しただけである。鉄釘は下位のみ6.6cm遺存し、身部断面は方形を呈する角釘である。身部には横方向に木目が付着する。

須恵器はごく細片のため明確な器形を想定することは非常に困難であるが、あえていうならば、甕および壺の口縁部とみることもできる。

4．ま と め

当古墳の石室は推定全長約４m、幅0.9mの小規模な無袖式横穴式石室で、墳丘も径約6.3mと小規模な古墳である。ただ、袖部を意識した石材の存在は、袖部が消滅する前段階の石室として注目される。

さて、当古墳の築造年代であるが、当古墳は流出および盗掘に会っているため、直接年代を考究する資料に欠き年代決定に躊躇する。その中にあって鉄釘を最近の鉄釘の研究成果から推定してみると、当古墳出土の鉄釘は断面が方形を呈し、短い釘とみることができることから、田中彩太氏のいうA₂類にあてはまり、時期をⅢ期すなわち６世紀後葉に比定することができよう。[1] さらに、大津市内の古墳からは、同形態の鉄釘が６世紀後半から７世紀前葉の土器を伴なって出土している。[2]

つぎに、石室構築法をながめてみると、石室は小型で、無袖式へ移行する傾向にある。さらに、奥壁は基底部に大きな石を使用している。このような様相は黄牛塚古墳、[3] 上ノ山１号墳等[4]湖北地方で６世紀後半以降にみられる現象である。しかし、終末期の特徴を示す諸頭山２号墳[5]よりは古い形態を示すと思われる。以上のことから、当古墳の築造年代を類推してみると６世紀後半頃に比定してよいであろう。

立地については、長山に所在する古墳は当古墳以外すべて木棺直葬墳である。その中にあって横穴式石室を内部主体とする当古墳は、時代も異り特異な存在といえる。そのため、長山古墳群を考える上で、当古墳も含めて古墳群とするか、単独墳としてとらえるかである。

このことは、田中勝弘氏の指摘されている湖北地方古墳群のあり方の①のタイプ[6]をもっていえないだろうか。すなわち、木棺直葬墳の段階で長山の墳墓群は最盛期をむかえ、その後衰退していったタイプである。しかし、この問題は、長山木棺直葬墳の報告をまって結論つけられるものであり、ここでは、長山に横穴式石室を内部主体とする古墳が１基存在すると報告するにとどめたい。

注

①. 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」(『考古学研究』第25巻第２号. 1978年)

②. 福岡澄男「鉄釘接合木棺の復原と鉄釘について」(『滋賀県文化財調査報告』第４冊. 1969年) また、近年県教委、大津市教委の大津市北郊古墳群の調査により、古墳時代後期の鉄釘が数多く発見されている。

③. 別所健二・谷口義介「黄牛塚古墳」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1976年)

④. 田中勝弘「上ノ山古墳群」(註３と同じ)

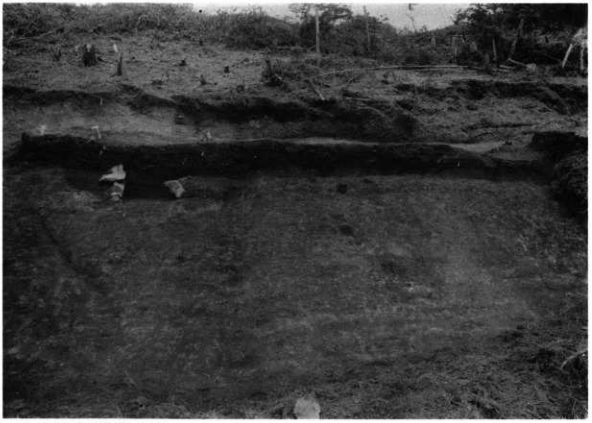
⑤. 田中勝弘「諸頭山古墳群」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1974年)

⑥. 田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1978年

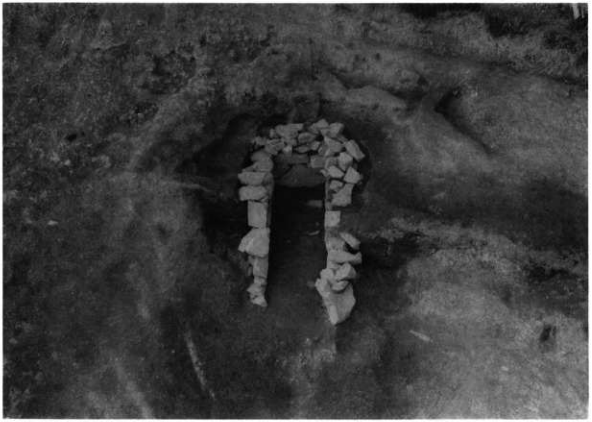
おわりに

黒田長野・東山古墳群は、工事中の発見で、非常に制約された中での調査であったが、平安時代前期、古墳後期及び中期、弥生時代後期とバラエティに富んだ遺跡であり、各々について貴重な資料を呈供してくれた。工事中に発見される場合は、開発、保存両者にとって非常に厳しい制約が課せられるばかりでなく、遺跡そのものに対しても、知り得べき範囲の何分の1かは、それが体制に影響のないものであっても、未調査で残されるのである。今回の調査を通じて、このことを痛感した次第である。

（田中　勝弘）



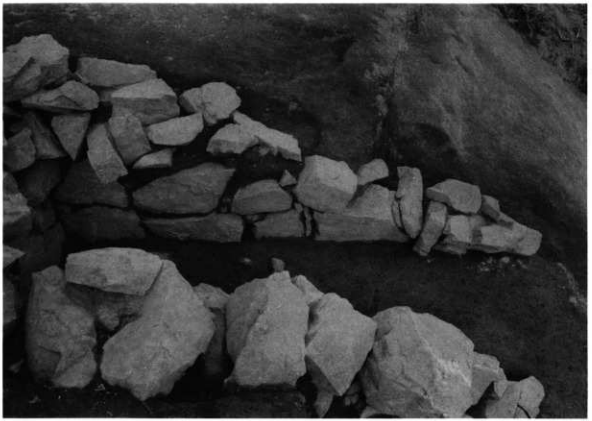
1　黒田長山イ号墳　遠景



2　黒田長山イ号墳　全景

1　黒田長山古墳イ号墳　横穴式石室全景

2　黒田長山イ号墳　横穴式石室全景



1　黒田長山イ号墳　玄室側壁

2　黒田長山イ号墳　玄室側壁

1　黒田長山イ号墳　横穴式石室奥壁

2　黒田長山イ号墳　奥壁裏込め状況

昭和55年3月10日　印刷
昭和55年3月30日　発行

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書　V

編　集　　滋賀県教育委員会

発　行　　滋賀県教育委員会
　　財団法人　滋賀県文化財保護協会

印刷製本　　有限会社　真陽社
　　京都市下京区油小路仏光寺上ル
　　TEL 351－6034番